

東北大学生の生活と意識に 関する調査

2019 年度行動科学基礎実習報告書

永吉希久子編

はじめに	2
学問的専門性の大学満足度に対する効果	4
大学生のアルバイト時間	13
東北大生の恋愛経験	20
大学生の外国語学習行動	24
東北大生における『変わっている』意識と、自己肯定感やコミュニケーションとの関連	31

はじめに

永吉希久子

本書は、東北大学文学部行動科学研究室で開講した 2019 年度の「行動科学基礎実習」の報告書である。行動科学基礎実習は東北大学文学部行動科学研究室に所属する学生の必修科目（3 年次配当、半期）となっており、2019 年度は 3 年生 14 名と 4 年生 1 名、大学院生 1 名が受講している。

この授業の目的は、社会調査の企画、設計、実査、結果の分析に至る一連の過程を、学生を主体として行うことで、社会調査を行うスキルを身につけるとともに、社会調査に対するリテラシーを身につけてもらうことにある。本年度はユニークなリサーチクエストが立てられ、その検証が行われている。班によっては仮説を実際の調査項目に落とし込む段階でうまくいかず、思うように分析することができなかつたところもある。しかしそのようにうまくいかなかった経験が、次に調査を機会するとき生きてくるのであり、実習を行った価値があったといえるだろう。近年では、二次分析で使用できるデータも増え、実際に自分で調査を行う機会は、研究者の中でも減ってきているように思う。しかし、今回の実査を経験することで、貴重な時間を割いて答えてくれた人たちがいるということを実感することができたのではないかと思う。

本年度の実習では東北大学文学部の 2 年生、3 年生を対象とした。計画サンプル数は 200 だったが、最終的に担当教員の方の許諾を頂き、調査を依頼したのは 215 名であった。調査は 2019 年 6 月に対象として選ばれた研究室で実施している授業の最後／最初に配布・回収を行い、持ち帰って自記式で回答してもらった。また半数の授業では QR コードを配布し、ウェブ形式で調査を実施した。無効票を除いた有効回収数は 112、有効回収率は 52.1%である。先生方の協力をいただいたことで回収率は高かったものの、配布数が少なかつたため、最終的なサンプルサイズが小さくなつた点は反省点となる。

この調査に際しては、多くの方にご協力いただいた。特に、調査に協力してくれた東北大学文学部生の皆様と、調査の趣旨を理解いただき、実施に協力して下さつた先生方に心からお礼申し上げます。眞田英毅さんには TA として様々な協力をいただいた。これらの方々のご尽力があったからこそ、調査を実施することができた。厚くお礼申し上げます。

今回の調査について、簡単に説明しておく。調査票の質問項目は、学生の関心にしたがって、新規に作成したものである。学生は、研究関心をもとに 5 つの班に分かれ、その中での議論を通じて、研究関心を明確化し、質問文を作成した。また、母集団を東北大学文学部の 2 年生、3 年生と決め、受講学生が主体となって、対象となる研究室の無作為抽出、授業担当教員へのアポイント、調査票の配布、回収を行った。研究室は専修によって層化したうえで、無作為抽出により抽出した。

性別、学年の分布を見ると、女性の割合が 64.3%と母集団（51.1%）よりやや高くなつていた。このほか、授業での配布を行ったため、より真面目な学生に偏つたサンプルとなつた可能性がある。

調査実習を行うたびに、反省点が生じる。具体的なりサーチクエストの設定や、ワーディング、分析にも、改善の余地は大いにある。班によってはグループワークに問題が生じたところもあり、調査実習の枠を超えた部分での難しさもある。

社会調査実習は調査に協力して下さる方の存在なしには成り立たない授業であり、この授業が「調査公害」にならないかという懸念が常に付きまとう。その一方で、よりよい調査を行うためには、事前の先行研究の読み込みやワーディングの検討、実査、分析などさらに時間をかける必要が生じ、受講生にとっての負担が大きくなる。調査に協力してくれた人に還元できるような成果をあげつつ、受講生にとって無理のない程度の負担にとどまる調査を行うことが、この授業の課題であるといえよう。

最後に、この報告書の元となるのは学生たちが授業の課題として書いたレポートである。こうして報告書を作成することができたのは、受講学生の頑張りによるところが大きい。この授業での経験が、受講生の今後の学生生活、社会生活に生かせるものであることを願う。

学問的専門性の大学満足度に対する効果

嘉津山拓登・小松浩太郎・横山大輔

1. 研究関心の設定とリサーチクエスチョンの設定について

現在、日本においては「大学全入時代」といわれるように多くの学生が当たり前のように大学に入学する。それらは文部科学省の調査においても示されており、平成4年度の大学進学率が約39%であるのに対し、平成23年度には約51%に増加している。さらに大学自体の収容率についても平成4年度は約60%であったのが、平成23年度においては約92%と増加している(文部科学省, 2011)。以上より、以前よりも大学教育を受ける学生数は増加していると言えるだろう。

その一方で、大学教育自体も大きな転換期を迎え「教養教育」が広く普及した。この「教養教育」は今までの専門的学問から離れ、広く横断的な学力を身につけるために幅広い分野の学習を行う教育である。これらは旧帝国大学を中心に国公立大学でも取り入れられ1,2年次生を中心に教養教育が施されている。また、東京大学や北海道大学のように入学試験時から「総合入試」として従来のように学部入試を行わず、入学後に「教養教育」を受ける中で所属したい学部を選択する方策を採ったり、桜美林大学のように「リベラルアーツ」に関する学部を採り入れたりと従来の専門的教育からの転換がみられる。

そのような現状において、大学生は「教養教育」を施されることで従来の学部学科に関する専門的教育から転換した幅広い教育を受けることが出来る。ただし、大学は多くの学生を抱える教育機関でもあることから学生側のニーズも検討していく必要がある。現在の「教養教育」への志向の高まりは社会的な潮流でもある。「教養教育」は専門的な知識に偏らず広く横断的な知識を持つことで、より柔軟で学問横断的な発想が出来るといった思惑の下で普及しているが、私たちは果たして実際に大学に所属する学生が「教養教育」を求めているのか調査する必要があるとの考えに至った。さらに、学生がどのような要因から大学という教育機関に対して評価ないし満足しているのかも調査する必要がある。

2. 先行研究

まず、「教員とのコミュニケーション」が「学習意欲」に影響を与え、さらに大学生生活の満足度にも影響を及ぼしており、一方で「友人とのコミュニケーション」は満足度に影響しないという、コミュニケーションに関連する観点での大学満足度への影響がすでに示されており(見館ほか, 2008)、さらに教員側の努力や学生に対するコミュニケーション、そして学生側の努力や授業への理解度が大学における授業への満足度に影響している(星野・牟田, 2005)。これらの研究から、コミュニケーション的要素や教育を提供する教員側の要素、そして教育を受ける学生側の要素が、大学への満足度に影響を与える要因であると考えることが出来るだろう。

また、大学への満足度は、大学自体の要因のみならず、学生が所属する大学が学生にとっての第一志望であったかなども影響しており、特に第1志望で無い場合に大学への満足度が低くなる(大隅ほか, 2008)。これは大学の教育内容のみが学生の満足度を規定している訳ではないということを示しているだろう。

一方で、正課活動、課外活動、建学理念に基づいた各大学の個性的な教育が学生の満足度に影

響を与え、また友人との関係が課外活動の積極性を通して大学の総合的満足度を上げるなどの結果も得られている(鈴木・遠藤, 2015)。

以上より、大学生の満足度に関しては、コミュニケーション的要素や本人の努力、教育内容などの要因に着目されて研究がなされているが、近年の潮流である「教養教育」及び、もともと大学機関によって供給されることが期待されているであろう専門的な教育に関する視点からの研究はなされていない。

3. 仮説

今回、仮説を導き出すために、学問分野ごとに“総合的な大学満足度”や“勉学面での大学満足度”の度合いが異なるのか、学年ごとに“総合的な大学満足度”や“勉学面での大学満足度”の度合いが異なるのか、分析を行った。その分析結果を以下に示す。

3.1 学問専攻ごとの総合的な大学満足度や勉学面での大学満足度の度合い

学問専攻については、東北大学文学部の専修分類に拠って、日本学専攻(現代日本学、日本思想史、日本語学、日本語教育学、日本文学、日本史、考古学)、広域文化学専攻(文化人類学、宗教学、インド学仏教史、中国文学、中国思想、東洋史、英文学、英語学、ドイツ文学、フランス文学、西洋史)、総合人間学専攻(哲学、倫理学、東洋日本美術史、美学西洋美術史、心理学、言語学、社会学、行動科学)の3分類とした。

そして、その3分類で“総合的な大学満足度”(質問文「課外活動(サークルやアルバイト等)を含めた総合的な面で大学生活に満足している」に対する5件法の回答「1.そう思う」～「5.そう思わない」の逆転項目)と“勉学面での大学満足度”(質問文「研究や学習面で大学生活に満足している」に対する5件法の回答「1.そう思う」～「5.そう思わない」の逆転項目)の平均に差があるか検討する。

本来、“総合的な大学満足度”と“勉学面での大学満足度”の尺度は順序尺度であり、平均の差を検証するのは適切ではないが、便宜的に間隔尺度として解釈して分散分析(ウェルチの修正分散分析)を行う。

結果は以下の通りである。“総合的な大学満足度”と“勉学面での大学満足度”のそれぞれにおいて、広域文化学、日本学、総合人間学の順に平均値が大きくなっていくが、ウェルチの修正分散分析を行ったところ、その差は有意でなかった。この結果から、専攻の3分類間の“総合的な大学満足度”や“勉学面での大学満足度”の平均値に有意な差がないことが分かる。

表1.学問専攻ごとの総合的な大学満足度

	度数	平均値	標準偏差
日本学専攻	35	3.86	0.91
広域文化学専攻	38	3.97	0.90
総合人間学専攻	30	3.53	1.07
合計	103	3.80	0.97
WelchF	1.61		

表2.学問専攻ごとの勉学面での大学満足度

	度数	平均値	標準偏差
日本学専攻	35	3.74	1.04
広域文化学専攻	38	3.92	0.85
総合人間学専攻	30	3.50	1.01
合計	103	3.74	0.97
WelchF	1.66		

3.2 学年ごとの総合的な大学満足度や勉学面での大学満足度の度合い

学年については、標本に占める割合が小さい学部1年、4年と、大学在籍年数が分からない研

究生、その他を除外し、学部2年と学部3年、院生の3分類とした。そして、その3分類で“総合的な大学満足度”(処理は3.1と同様)と“勉学面での大学満足度”(処理は3.1と同様)の平均に差があるか検討する。2変数は3.1と同様、便宜的に間隔尺度として解釈して分散分析(ウェルチの修正分散分析)を行う。

結果は以下の通りである。“総合的な大学満足度”において、学年が上がるごとに平均値が数値上増加しているように見えるが、ウェルチの修正分散分析を行ったところ、その差は有意でなかった。しかし、“勉学面での大学満足度”においては、学部3年、2年、院生の順で平均値が大きくなり、ウェルチの修正分散分析を行ったところ、その差は5%水準で有意であった。この結果から、学年の3分類間の総合的な大学満足度の平均値に有意な差はないものの、勉学面での大学満足度の平均値には有意な差があり、学年によって勉学面での大学満足度が異なる傾向にあると考えられる。

表3.学年ごとの総合的な大学満足度

	度数	平均値	標準偏差
学部2年	42	3.81	1.02
学部3年	50	3.90	0.94
院生	11	3.91	0.70
合計	103	3.86	0.94
WelchF	0.11		

表4.学年ごとの勉学面での大学満足度

	度数	平均値	標準偏差
学部2年	42	3.76	1.01
学部3年	50	3.60	1.01
院生	11	4.27	0.65
合計	103	3.73	0.99
WelchF	3.87*		

* $p < 0.05$

以上の結果を踏まえて分かることは、専攻によって総合的な大学満足度や勉学面での大学満足度に差はないこと、学年によって総合的な大学満足度に差はないものの、勉学面での大学満足度には差があるということである。ここで特に注目すべきなのは、学年の要素である。そして、その背後には学問的専門性の効果が存在すると考えられる。何故なら、東北大学文学部では1年次は「教養教育」、2年次以降は研究室に配属されて専門教育を受けるというシステムであるため、それを前提として結果を検討してみると、総合的な大学満足度では学年によって有意な差が出ていないものの、学年が上がるに連れてその数値が大きくなっている傾向を一応読み取ることが出来、その背後には当然人間関係の変化等の効果と共に学問的専門性の効果も存在しうると考えられるからだ。また、勉学面での大学満足度では学部2年と3年で平均値の大きさが逆になっているものの、調査時期(6月)が進級後、つまり研究室配属直後であることを考えれば、学問的専門性において学部2年が学部3年を上回ることは十分想定できる。よって、学問的専門性の観点から、総合的な大学満足度と勉学面での大学満足度について、以下のような仮説を設定する。

仮説1：「総合的な大学満足度に対して学問的専門性の効果がある」

仮説2：「勉学面での大学満足度に対して学問的専門性の効果がある」

4. 分析に用いる変数

仮説1の従属変数は“総合的な大学満足度”とし、質問文「課外活動(サークルやアルバイト等)を含めた総合的な面で大学生活に満足している」に対する5件法の回答「1.そう思う」～「5.そう思わない」を逆転項目として使用した。また、仮説2の従属変数は“勉学面での大学満足度”とし、

質問文「研究や学習面で大学生活に満足している」に対する5件法の回答「1.そう思う」～「5.そう思わない」を逆転項目として使用した。

独立変数は“学問的専門性”とし、質問文「現在は1年生の時よりも自分の専門分野について勉強することが出来ていると思う」、「専修の授業では他の授業よりも予習や復習、課題、テスト勉強に力を入れている」、「授業外でも自分の専門分野を中心に専門書や新書を読むなどして勉強している」、「大学では自分の専門分野を中心に勉強するべきであると思う」それぞれに対する5件法の回答「1.そう思う」～「5.そう思わない」を逆転項目として使用し、主成分分析で学問的専門性の合成変数を作成した。

共通の統制変数は、“学生の努力”(質問文「レポートや課題はただこなしている」、「レポートや課題は最小限の努力で取り組む」、「授業には意欲的に参加している」、「単位さえ取れば良いと考えて授業に参加している」、「授業を熱心に聞いている」、「自分は学習意欲が高い方だと思う」、「実際に自分は積極的に学習していると思う」、「勉強が好きである」)、“勉強への理解度”(質問文「自分は大学の勉強についていけていると思う」)、“学問的教養志向”(質問文「授業外では自分の専門分野以外の学問を中心に勉強している」、「大学では自分の専門分野を極めるよりもいろいろな分野の学問に触れるべきであると思う」)、“学習環境”(質問文「学生が学習するための施設が整備されている」、「学習意欲を高めてくれる環境である」、「専修配属に際して自分の希望が十分反映された」、「現在所属する専修に対して満足している」)、“教員のやる気”(質問文「教員は学生とのコミュニケーションを密にしている」、「授業や研究室での指導で教員から熱意を感じる」)、“人間関係への満足度”(質問文「課外活動や授業内活動での人間関係に満足している」)、“性別”とし、性別以外の変数は、“学生の努力”で用いた一部の回答を除いて、5件法の回答「1.そう思う」～「5.そう思わない」を逆転項目として使用し、主成分分析で合成変数を作成した。“学生の努力”では、質問文「レポートや課題はただ～」、「レポートや課題は最小限～」、「単位さえ～」の5件法の回答をそのまま使用し、その他の質問文の回答と共に主成分分析で合成変数を作成した。また、“性別”は「3.その他」、「4.答えたくない」という回答を除外し、女性を基準カテゴリとした。

5. 分析結果

5.1 分析方法

従属変数が順序尺度であるため、順序ロジスティック回帰を用いる。まず、用いる変数の記述統計量を確認する。次に、主要な独立変数である学問的専門性の変数について確認する。最後に、総合的な大学満足度に対する学問的専門性単体の効果を確認し、その効果が統制変数を考慮することによってどの程度減少するのか、また統制後も学問的専門性の効果が残るのかを調べる。続いての勉学面での大学満足度の分析も同様に行う。

5.2 記述統計量

記述統計量の表は以下の通り。

表5.用いる変数の記述統計量

	最小値	平均	標準偏差	最大値
学問的専門性	3.84	0.00	1.00	2.21
総合的な大学満足度	1.00	3.84	0.95	5.00
勉学面での大学満足度	1.00	3.74	0.97	5.00
学生の努力	4.96	0.00	1.00	4.48
勉強への理解度	1.00	3.37	0.93	5.00
学問的教養志向	2.76	0.00	1.00	2.61
学習環境	6.41	0.00	1.00	1.67
教員のやる気	3.72	0.00	1.00	1.67
人間関係への満足度	1.00	3.78	1.00	5.00
男性ダミー	0.00	0.68	0.47	1.00

N = 105

5.3 学問的専門性の変数について

学問的専門性に関する4変数におけるCronbachの信頼性係数は0.71である。続いて主成分分析を行ったところ、第一主成分の固有値は2.125であり、4変数それぞれの主成分負荷量は、「1年生の時より専門の勉強が出来ている」で0.758、「専修の勉強を重視する」で0.890、「授業外で専門の勉強をする」で0.533、「専門分野を中心に勉強すべきという考え」で0.689であった。そして、この主成分得点と「総合的な大学満足度」との相関係数は0.335であった。また、この主成分得点と「勉学面での大学満足度」との相関係数は0.432であった。

表6.学問的専門性についての主成分分析

	学問的専門性
1年生の時より専門の勉強が出来ている	0.758
専修の勉強を重視する	0.890
授業外で専門の勉強をする	0.533
専門分野を勉強すべきという考え	0.689
固有値	2.125
寄与率	53.129

N = 105

表7.学問的専門性と総合的な大学満足度の相関

	総合的な大学満足度
学問的専門性	0.335**

N = 105, ** $p < 0.01$

表8.学問的専門性と勉学面での大学満足度の相関

勉学面での大学満足度	
学問的専門性	0.432**

N = 105,** p < 0.01

5.5 分析結果(仮説1)

総合的な大学満足度に対する学問的専門性の効果のみを確認した場合、その効果は0.450であり、1%水準で統計的に有意な効果がある。この場合のNagelkerkeのR²乗値は0.113である。そして、学生の努力、勉強への理解度、学問的教養志向、学習環境、教員のやる気、人間関係への満足度、性別を統制した上で、総合的な大学満足度に対する学問的専門性の効果を確認すると、その効果は0.270であり、10%水準で統計的に有意な効果がある。この場合のNagelkerkeのR²乗値は0.405である。

以上の結果より、総合的な大学満足度に対する学問的専門性の効果は、統制前では1%水準で統計的に有意な効果があるものの、統制後では10%水準での統計的に有意な効果となる。よって、総合的な大学満足度に対する学問的専門性の効果は単体で見ると有意な効果があると判断出来るが、その効果は他の変数を統制することによって減少し、有意な効果ではなくなる。そして、他の統制変数と比べると、例えば人間関係への満足度のように、学問的専門性よりも総合的な大学満足度をより良く説明出来る変数が存在することが分かる。

表9.大学への総合的な満足度のロジスティック回帰分析

	B	S.E.
切片1	4.902**	1.018
切片2	2.418**	0.347
切片3	0.734**	0.216
切片4	-1.089**	0.228
学問的専門性	0.450**	0.129
G2	11.611**	
Nagelkerke R ²	0.113	

N = 105,** p < 0.01,

表10.大学への総合的な満足度の順序ロジスティック回帰分析

	B	S.E.
切片1	0.174	1.417
切片2	-2.618*	1.071
切片3	-4.686**	1.117
切片4	-7.074**	1.237
学生の努力	-0.182	0.118
勉強への理解度	0.791**	0.251
学問的専門性	0.270 †	0.161
学問的教養志向	0.290	0.204
学習環境	0.402*	0.165
教員のやる気	-0.100	0.199
人間関係への満足度	0.741**	0.231
男性	0.494	0.419
女性(ref)		
G2	49.537**	
Nagelkerke R2	0.405	

N = 105, ** $p < 0.01$, * $p < 0.05$, † $p < 0.10$

5.6 分析結果（仮説2）

勉学面での大学満足度に対する学問的専門性の効果のみを確認した場合、その効果は0.625であり、1%水準で統計的に有意な効果がある。この場合のNagelkerkeのR2乗値は0.193である。そして、学生の努力、勉強への理解度、学問的教養志向、学習環境、教員のやる気、人間関係への満足度、性別を統制した上で、勉学面での大学満足度に対する学問的専門性の効果を確認すると、その効果は0.152であり、有意な効果ではなくなった。この場合のNagelkerkeのR2乗値は0.485である。

以上の結果より、勉学面での大学満足度に対する学問的専門性の効果は、統制前では1%水準で統計的に有意な効果があるものの、統制後では有意な効果ではなくなる。よって、勉学面での大学満足度に対する学問的専門性の効果は単体で見ると有意な効果があると判断出来るが、その効果は他の変数を統制することによって減少し、有意な効果ではなくなる。そして、仮説1の時の分析と同じように、他の統制変数と比べると、例えば学習環境のように、学問的専門性よりも勉学面での大学満足度をより良く説明出来る変数が存在することが分かる。

表11.勉学面での大学満足度のロジスティック回帰分析

	B	S.E.
切片1	4.410**	0.738
切片2	2.352**	0.340
切片3	0.633**	0.220
切片4	-1.443**	0.249
学問的専門性	0.625**	0.137
G2	20.841**	
Nagelkerke R2	0.193	

N = 105, ** $p < 0.01$,

表12.勉学面での大学満足度の順序ロジスティック回帰分析

	B	S.E.
切片1	1.494	1.239
切片2	-0.833	1.062
切片3	-3.028**	1.069
切片4	-5.815**	1.195
学生の努力	0.194	0.119
勉強への理解度	0.598*	0.244
学問的専門性	0.152	0.163
学問的教養志向	0.023	0.201
学習環境	0.545**	0.169
教員のやる気	0.099	0.200
人間関係への満足度	0.476*	0.229
男性	0.242	0.418
女性(ref)		
G2	63.179**	
Nagelkerke R2	0.485	

N = 105, ** $p < 0.01$, * $p < 0.05$

6. 考察と結論

まず、最初に提示した仮説が支持されたか確認する。その仮説をもう1度確認すると、仮説1が「総合的な大学満足度に対して学問的専門性の効果がある」で、仮説2が「勉学面での大学満足度に対して学問的専門性の効果がある」である。統制変数を加味した上での順序ロジスティック回帰分析の結果より、大学への総合的な満足度に対する学問的専門性の効果が10%水準で有意であったが、大学満足度に対する学問的専門性の効果は統計的に有意であるとは言えず、これらの仮説が支持されたとは言えない。そもそも、ここでいう“学問的専門性”について説明する。今回の調査では、学問的専門性を専門の勉強を志向しているかという尺度として位置付けている。この変数が大学満足度に影響しているか明らかにしたかった訳であるが、先行研究を見渡してもそのような仮説・モデルは見受けられず、例えば友人関係などの先行研究で述べられていた変数が有意な効果を示していたため、今回の学問的専門性や学問的教養志向を盛り込んだ仮説は、少し強引であったと認めざるを得ない。

一方で、大学満足度に影響を与えていた変数について言及する。それは、総合的満足度と勉学

面での満足度に共通して「勉強への理解度」と「学習環境」、「人間関係への満足度」である。すなわち、これらの変数が上昇したときに総合面と勉学面で大学満足度が上昇するということである。これは先行研究からもおおよそ予想がつくことである。因みに、総合的な大学満足度において、「学習環境」や「人間関係への満足度」の変数を抜くと、学問的専門性の効果が有意になり(5%水準)、勉学面での満足度では「学習環境」や「教員のやる気」の変数を抜くことで、学問的専門性の効果が有意になった(10%水準)。これらの結果から言えるのは、大学生活を形成する環境の部分部分における満足度が総合的な満足度、勉学面での満足度に影響しているということである。

また、興味深いのは、有意な効果ではないが、「学生のやる気」と「教員のやる気」が総合的な大学満足度に負の効果を持っているということである。つまり、「学生のやる気」と「教員のやる気」が上昇すると、総合的な大学満足度が下がるということである。「学生のやる気」は満足度に対して正の効果を持っていると考えるのが一般的であるように思われるが、今回の調査では逆の効果が観察された。この結果を考察してみる。「学生のやる気」の水準が高い、すなわち大学での学習活動に意欲的な学生はその分学習面以外の大学生活に割く時間が圧迫されて両立するのに苦労する結果、総合的な満足度が下がってしまうという仮説が考えられる。それは、勉学面での満足度に対する「学生のやる気」と「教員のやる気」の効果(こちらも有意な効果ではない)が正であることから導き出せるだろう。

今回の調査では、問題点がいくつかある。それはサンプルサイズが小さいこと、対象が文学部の学生のみで限定されすぎていることなどである。また、大学満足度に影響を与える変数は今回の調査で扱った変数以外にも数多く考えられ、今回の結果も踏まえながら、変数やモデルの見極めを行っていく必要があると言える。

【参考資料】

- 星野敦子・牟田博光. 2005. 「大学の授業における諸要因の相互作用と授業満足度の因果関係」『日本教育工学会論文誌』 29:463-473.
- 見館好隆・永井正洋・北澤武・上野淳. 2008. 「大学生の学習意欲、大学生活満足度を規定する要因について」『日本教育工学会論文誌』 32(2):189-196
- 文部科学省. 2011. 「大学の入学定員・入学者数等の推移」
www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/giji/_icsFiles/afieldfile/2012/10/03/1326458_3.pdf
f (最終アクセス：2019年7月23日.)
- 大隅香・小塩真司・小倉正義・渡邊賢二・大崎園生・平石賢二. 2008. 「大学新入生の大学適応に及ぼす影響要因の検討：第1 志望か否か,合格可能性,仲間志向に注目して」『青年心理学研究』 24(2):125-136.
- 鈴木仰・遠藤敏喜. 2015. 「リベラルアーツ大学における学生満足度の構造方程式モデリング」『生活大学研究』 1(1):88-96.

大学生のアルバイト時間

佐藤佳乃・高橋愛里・高橋七海・高谷詩帆

1. 研究関心とリサーチクエスチョン

大学生とアルバイト。この2つの単語を聞いて、関連を見出す人は多いのではなかろうか。アルバイトは今日の大学生にとって、学業やサークル活動と並ぶような重要な項目である。全国大学生生活協同組合連合会（2019）が実施した「学生生活実態調査」によると、2018年時点でアルバイトをしていると答えた学生は、実に74.1%にも上り、この10年で9.4ポイントも上昇している。これに伴い、1か月のアルバイト収入、時間数の平均も上昇傾向にあるという。このことから大学生にとって、アルバイトの重要度は高いと言える。

また「やめたいのにやめられない」「出勤できない日に出勤させられる」など、アルバイト先で無理に働かされている大学生は少なくない（高本・古村, 2018）。つまりアルバイト時間の上昇に伴い、このような弊害も起こっていることになる。そのみならず、自らかなりの量のシフトを入れる大学生も一定数いる。これらの要因から、結果として寝不足や疲労で大学の講義を欠席するなど、日常生活に支障をきたすまでに至る大学生も存在する。なぜこれほどまでにアルバイトをしなければならない大学生がいるのだろうか。このような疑問を踏まえ、私たちは「学生ごとにアルバイト時間に差が見られるのは何故か」というリサーチクエスチョンを立てた。

2. 先行研究と仮説

木戸口正宏によると、大学生のアルバイト職種は「飲食店」「塾講師」などが多く、週2日程度の勤務が主だという。またアルバイトをする理由として、「生活費を稼ぐ必要がある」「友人との交際や研究室活動等でお金が必要」が特に多いとのことだった（木戸口, 2013）。ここから学生ごとにアルバイト時間に差が見られる理由として、生活費や交際費を稼ぐためという答えが推察される。だがたとえば週2日程度の勤務が夜勤ならまだしも、日中や夕方であれば、生活に支障をきたすとは考えにくい。そしてアルバイトをする理由がわかっただけでは、どの程度大変なのかもわからない。そのため先行研究から、第1説で述べた生活に支障をきたしてまで働く大学生の理由は読みとれない。そこで私たちは以下の仮説を立てた。

仮説：娯楽費などに加え、必要経費（学費、生活費）を自分で稼ぐ必要がある大学生は、アルバイト時間が長い。

当然ながら奨学金や仕送りが十分な額ならば、無理して働く必要はないだろう。だが学費や生活費など、どの大学生でも必要とする費用も自己負担ならば、当然働く必要が出てくる。そこに生活に支障をきたすほど働く大学生と、そうでない大学生の違いが出るのではなかろうか。そのような考えのもとで上記の仮説を立てた。

3. 使用変数

以下に今回の分析に使用する変数の説明を記述する。

・月平均アルバイト時間

「月の平均アルバイト時間は何時間ですか。」という質問に対し、なし、10 時間未満、10 時間以上 30 時間未満、30 時間以上 50 時間未満、50 時間以上 70 時間未満、70 時間以上 90 時間未満、90 時間以上の 7 カテゴリーで調査した。

分析では、これらを連続変数として、0 時間、5 時間、20 時間、40 時間、60 時間、80 時間、100 時間の 7 つにリコードしたものを使用した。

・居住形態

「あなたは現在、どのように生活していますか。」という質問に対し、両親と一緒に生活、両親以外の家族と生活、寮などで生活、1 人暮らし、その他の 5 カテゴリーで調査した。

分析では、両親と一緒に生活、両親以外の家族と生活をまとめて「家族と生活カテゴリ」、寮などで生活、1 人暮らしをまとめて「1 人暮らしカテゴリ」とし、この 2 つを変数として用いた。前者を基準カテゴリとし、「1 人暮らしダミー」という変数を作成した。その他は欠損値とした。

・月平均仕送り額

「月の平均仕送り額はいくらですか。ただし家賃が含まれている場合は、差し引いて考えてください。」という質問に対し、なし、1 万円未満、1 万円以上 3 万円未満、3 万円以上 5 万円未満、5 万円以上 7 万円未満、7 万円以上 9 万円未満、9 万円以上の 7 カテゴリーで調査した。

分析では、これらを連続変数として、0 円、0.5 万円、2 万円、4 万円、6 万円、8 万円、10 万円の 7 つにリコードしたものを使用した。

・奨学金受給額（月額）

「月の奨学金受給額はいくらですか。」という質問に対し、なし、3 万円未満、3 万円以上 5 万円未満、5 万円以上 8 万円未満、8 万円以上の 5 カテゴリーで調査した。

分析では、これらを連続変数として、0 円、2 万円、4 万円、6 万円、8 万円の 5 つにリコードしたものを使用した。

・学費の原資

「学費（授業料、講座代、教科書代）はどこから出していますか。」という質問に対し、家庭、アルバイト、奨学金、その他の 4 カテゴリーで調査した。

分析では、アルバイトを選択したか否かに焦点を当て、「アルバイト収入からの学費の支出あり」、「アルバイト収入からの支出なし」の 2 つを変数として用いた。後者を基準カテゴリとし、「学費の原資ダミー」という変数を作成した。

・アルバイト収入からの月平均生活費支出額

「生活費（食費、交通費、光熱費、雑費）はアルバイト代から月平均いくら出していますか。ただし家賃は含めないでください。」という質問に対し、なし、1 万円未満、1 万円以上 3 万円未満、3 万円以上 5 万円未満、5 万円以上 7 万円未満、7 万円以上 9 万円未満、9 万円以上の 7 カテゴリーで調査した。

分析では、これらを連続変数として、0円、0.5万円、2万円、4万円、6万円、8万円、10万円の7つにリコードしたものを使用した。

・月平均娯楽費支出額

「上記以外の出費(交通費、サークル関連費、趣味にかかる費用など)は月平均いくらですか。」という質問に対し、なし、5千円未満、5千円以上1万円未満、1万円以上2万円未満、2万円以上3万円未満、3万円以上の6カテゴリで調査した。

分析では、これらを連続変数として、0円、0.25万円、0.75万円、1.5万円、2.5万円、3.5万円の6カテゴリにリコードしたものを使用した。

・性別

「あなたは男性ですか、女性ですか。」という質問に対し、男性、女性、その他、答えたくないの4カテゴリで調査した。

分析では、「男性」「女性」の2つを変数として用いた。女性を基準カテゴリとし、「男性ダミー」という変数を作成した。無回答、その他、答えたくないと回答した人は欠損値とした。

4. 分析結果

今回の分析では、まず主要な変数に関して記述統計を算出し、次に主要な2変数の関連を見た。最後に、重回帰分析でそれぞれの変数の関連を見た。

4.1 記述統計

以下にそれぞれの記述統計を記す。

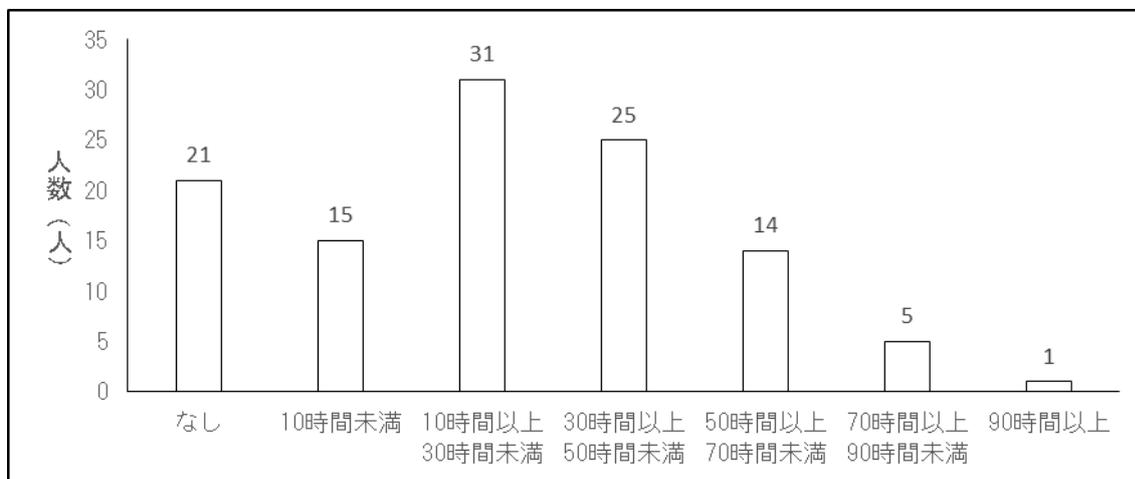


図1. 月平均アルバイト時間の分布

月平均アルバイト時間について上記のグラフのような結果が得られた。10時間以上30時間未満と回答した人が、31人と最も多かった。次いで30時間以上50時間未満となっており、大きな偏りは見られない。また約2割の人がバイトをしていない結果となった。

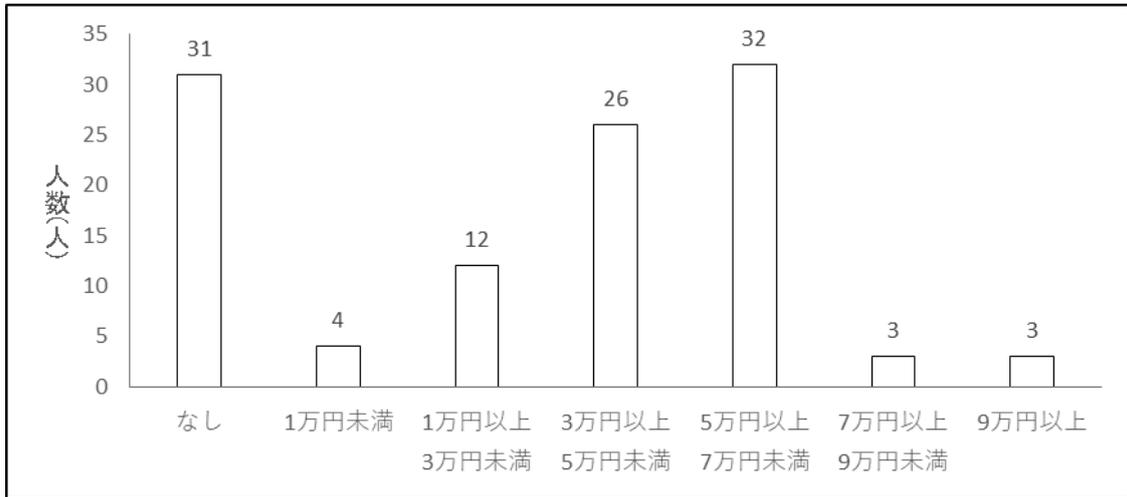


図 2. 月平均仕送り額

月仕送り額について上記のグラフのような結果が得られた。5万円以上7万円未満と回答した人が32人と最も多く、次いで仕送りを貰っていない人が31人だった。

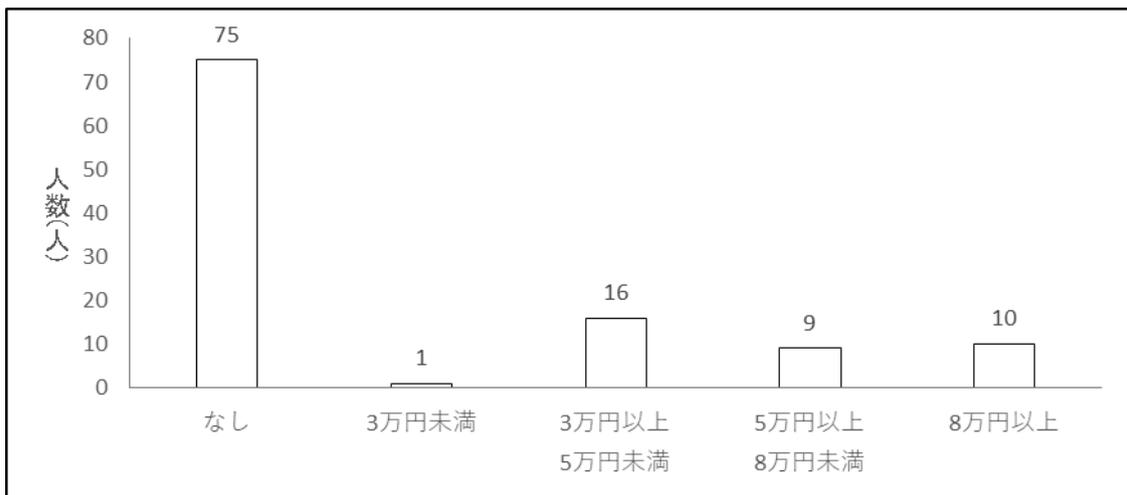


図 3. 月の奨学金受給額

月の奨学金受給額について上記のグラフのような結果が得られた。奨学金を貰っていない人が75人と最も多く、その他の人数に大きな差は見られない。また貰っている人の中では、3万円以上5万円未満の人が多い結果となった。

4.2 2変数の関連

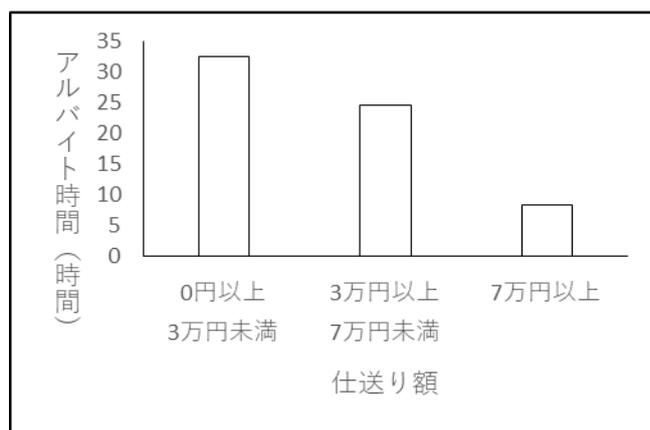


図4. アルバイト時間と仕送りの関係

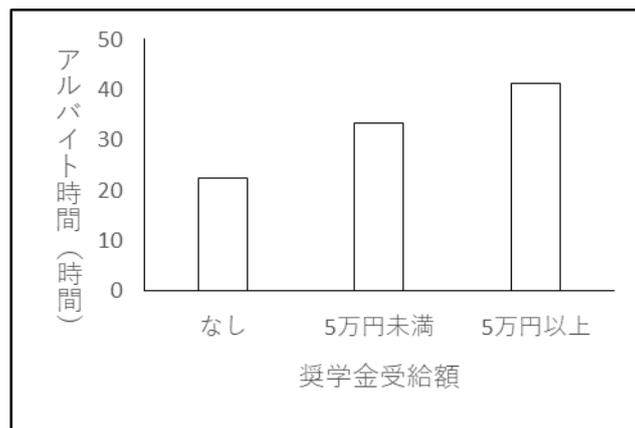


図5. アルバイト時間と奨学金受給額

上記のグラフは仕送り額、奨学金受給額ごとのアルバイト時間の平均値を示したものである。また、合わせて相関分析も行った。アルバイト時間と仕送り額には負の相関が見られる。相関係数が -0.26 で、1%水準で有意だった。つまり仕送り額が少ない人ほど、アルバイト時間が長いことになる。

続いて奨学金受給額を見ると、正の相関があることがわかる。相関係数が 0.28 で、1%水準で有意だった。これは奨学金受給額が多い人ほどアルバイト時間が長いことを表している。家庭からの支援が少ないことが原因と推測される。

5. 重回帰分析

以上の結果を踏まえつつ、重回帰分析を行った。従属変数にはアルバイト時間を用い、そして分析に関して3つ行った。なお多重共線性を考え、値が大きい変数を順に抜いている。詳しい内容は以下に記述する。

モデル1. アルバイト収入から支出している生活費（以下生活費）、独立変数にアルバイト収入から支出している学費（以下学費）、統制変数に居住形態、月平均仕送り額（以下仕送り額）、月平均奨学金受給額（以下奨学金）、娯楽費を用いる。

モデル2. モデル1から生活費を除いた変数を用いる。

モデル3. モデル1から生活費、奨学金を除いた変数を用いる。

以下に重回帰分析の結果をまとめた表を示す。

表1. アルバイト時間に関する重回帰分析

	モデル1		モデル2		モデル3	
	B	S.E.	B	S.E.	B	S.E.
切片	-0.000	0.082	-0.000	0.087	-0.000	0.090
生活費	0.316**	0.088	—	—	—	—
学費	0.119	0.087	0.207*	0.089	0.226*	0.092
仕送り額	-0.095	0.109	-0.094	0.117	-0.239*	0.109
奨学金	0.258**	0.093	0.286**	0.098	—	—

娯楽費	0.197*	0.087	0.171	0.092	0.220*	0.094
居住形態	0.199	0.103	0.165	0.108	0.072	0.107
男性ダミー	-0.027	0.084	-0.040	0.089	-0.015	0.092
調整済み R2 乗 0.308**						
N=105	**p<0.01	*p<0.05				

まずそれぞれのモデルに関して順に見ていく。

モデル 1 で統計的に有意であったのは、アルバイト収入から支出している生活費と奨学金受給額、娯楽費のみであった。生活費に関して、値は 0.316、1%水準で有意で、正の相関が見られる。つまりアルバイト収入から生活費を捻出している人ほど、アルバイト時間が長いことが読みとれる。奨学金に関しては 0.258、1%水準で有意で、正の相関が見られる。これはアルバイト時間が長い人ほど奨学金受給額が大きいということであり、2 変数の関連の分析で述べたことと合致している。娯楽費は 0.197 という数値で、5%水準で有意であり、正の相関がある。これは娯楽費が大きい人ほどアルバイト時間が長いということである。

モデル 2 では娯楽費が有意でなくなり、学費が 5%水準で有意になっている。学費は 0.207 であり、正の相関がある。これは学費をアルバイト代から多く出す人ほど、アルバイト時間が長いということである。

モデル 3 では新たに仕送り額が 5%水準で有意になっている。値は -0.239 で、負の相関がある。これは仕送り額が少ない人ほど、アルバイト時間が長いことになる。

ではここからモデルごとの違いを検証する。モデル 1 とモデル 2 を見ると、生活費を抜いたことで学費が有意になっている。これはアルバイト収入から支出する生活費と学費の関連があることにより、モデル 1 では学費が有意にならなかったと思われる。

またモデル 2 とモデル 3 を比べると、奨学金受給額を抜いたことで仕送り額が有意になっている。これは奨学金受給額と生活費に関連があることによると考えられる。

このような結果が出た理由として、家庭の経済状況が考えられる。家庭の収入が低ければ、奨学金の受給が可能になるし、仕送り額を捻出するのが難しいと考えられる。結果として、その個人への外からの支援は奨学金が殆どとなり、不足分の必要経費を賄うにはアルバイト時間を増やすしかなくなる。これにより、今まで述べてきた変数間の関係が構成されたと考える。

6. 考察と結論

考察として仮説の検証から始める。仮説「娯楽費などに加え、必要経費（学費、生活費）を自分で稼ぐ必要がある大学生は、アルバイト時間が長い」は、第 4 節の結果を踏まえると、一応採択することができる。第 4 節で見たように、生活費や学費、娯楽費を多く稼ぐ必要がある人は、アルバイト時間が長い傾向にあることがわかる。そういう人は奨学金を多く貰っており、仕送り額が少ないことから、家庭からの支援が少ないことも考えられる。そのためなおさらアルバイト時間を増やす必要があるだろう。だが家庭からの支援があっても娯楽費に多く使うため、アルバイト時間が長くなる可能性も捨てきれない。本研究では、個人が何に多く必要としているかは断言できないので、そこを今後研究する必要がある。また因果関係の方向性が曖昧であることも言っておかねばならない。つまり必要な金額を稼ぐためにアルバイト時間を増やしているのか、アルバイトしただけ経費に投入しているのか、今回の結果では定かでない。

では最後にリサーチクエスチョンに対する考察を述べる。「学生ごとにアルバイト時間に差が見られるのは何故か」という問いであった。結果を踏まえると、大学生は生活費や娯楽費を多く必要とするなら、アルバイト時間を増やし、その逆なら少ない時間で済みます。また生活費や娯楽費などの必要に応じて、アルバイト収入も変化する。そのためアルバイト時間にも差が出てきたのだろう。とどのつまり、生活費や娯楽費などの経費の必要に応じて、アルバイト時間も増減があるということになる。上述した逆因果関係であった場合も、使いたい額が大きければアルバイト時間を増やすことが予期されるので、必要に応じて増減があると言っても差し支えないだろう。先行研究では、アルバイト時間ごとの大学生の分布やアルバイトの理由にしか言及しておらず、関係性については述べていない。一方で本研究は、アルバイト時間と仕送り額、学費などの変数に相関があることを述べている。またアルバイト時間に関して、家庭状況の影響を可能性が具体的に示唆された。ここに本研究の意義があると考えられる。

最後に今後の課題として、前述の逆因果の可能性を調査することと調査対象者の拡大を挙げる。逆因果に関しては前述の通りである。調査対象者に関しては、仮説の前提にある「生活に支障をきたすほど働く」という状況はあまり見られなかった。それには標本数の少なさと対象者が東北大学の文学部生のみということが考えられる。そこで今後は調査対象者を拡大したうえで、逆因果を判明できる質問方法で調査をする必要がある。

【参考文献】

- 木戸口正宏. 2013. 「学生とともに「働くこと」を学ぶ（教養科目「現代社会と教育」における試み）その1—大学生のアルバイト経験に関する調査と大学教育・学生支援の課題」『釧路論集：北海道教育大学釧路港研究紀要』45: 75-84.
- 高本真寛・古村健太郎. 2018. 「大学生におけるアルバイト就労と精神的健康及び就学との関連」『教育心理学研究』66: 14-27.
- 全国大学生生活教育共同組合連合会. 2019. 『第54回学生生活実態調査の概要報告』（<https://www.univcoop.or.jp/press/life/report.html>, 最終アクセス：2020年3月5日）

東北大生の恋愛経験

澤泉樹・根井実織・柳沙由里

1. 研究関心の説明とリサーチクエスチョンの設定

これまで青年期の恋愛についての研究はある程度数が基本海外の研究でなされており、そこでは主にアイデンティティの確立と恋愛との関連（北原ほか,2008; 高坂, 2011）や、恋愛がうまくいっていないとされる人の特徴を捉え、その改善策などが挙げられてきた。

しかし先に述べたように、日本を対象とした、更にいえば大学生の恋愛の特徴について述べられているものは多くない。そこで、巷で噂になる“〇〇な人がモテる！”といった情報の真偽を確かめる研究を我々に行いたいと考えた。よって、我々のリサーチクエスチョンは「なぜ東北大生の中に恋愛経験の差が生じるのか」、つまり“東北大生に関して、どのような人物の恋愛経験が豊富なのか”ということになる。

2. 先行研究のまとめと仮説の提示

先行研究において、よく挙げられていたのが異性関係スキルについてである。堀毛（1994）によると、異性関係スキルとは、異性と関係を構築し、維持し、終結するのに必要な行動能力のことで、この能力が高いほど、異性との累計交際期間が長い、もしくは累計交際人数が多いことが予想される。今までの研究結果から、我々が設定した「なぜ東北大生の中に恋愛経験の差が生じるのか」というリサーチクエスチョンに対して立てられる仮説は以下の二つである。

(1) 本人の内的要因（アイデンティティ・性格等）の評価が高いと恋愛経験値が高い。

相羽（2008）より、性格などの内的要素が交際相手を選ぶ際に影響力を及ぼす要素になっているため、その評価が高いと、恋愛経験値が上がるのではないかと。

(2) 異性関係スキルが高いと、恋愛経験値が高い。

堀毛（1994）より、対異性への対応や判断が相手にとって良いと感じられるもののほうが多いと、恋愛経験値が上がるのではないかと。

3. 変数の説明

恋愛経験の測定をするために、これまで交際した人数と恋人がいた期間を数値で回答してもらった。

内的要因を、「対人コミュニケーション能力」、「社会的魅力」、「自分磨き」に分類し、それぞれに4~5つの質問文を設けた。「自分自身にどの程度当てはまりますか」という質問形式で、「当てはまる」（1点）、「どちらかといえば当てはまる」（2点）、「どちらともいえない」（3点）、「どちらかといえば当てはまらない」（4点）、「あてはまらない」（5点）の5件法で回答を求めた。

4. 分析結果

4.1 東北大生の恋愛状況基礎情報

1) 累計交際期間

付き合った期間の累積は、0ヶ月 35人(33.7%)、半年以内 3人(2.9%)、1年以内 14人(13.5%)、2年以内 22人(21.2%)、3年以内 10人(9.6%)、4年以上 10人(9.6%)の、最長80ヶ月となり、累計交際期間の平均値は14.77ヶ月(約1年3ヶ月)であった。

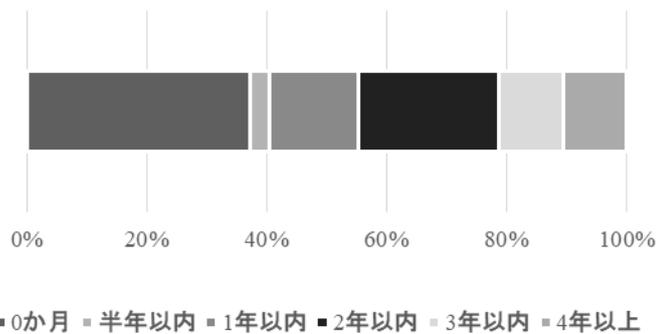


図1 累計交際期間

2) 累計交際人数

付き合った人数の合計値は、交際人数0人が36人(36%)、交際人数1人が17人(17%)、交際人数2人が21人(21%)、交際人数3人が18人(18%)、交際人数4人が6人(6%)、交際人数5人が2人(2%)。平均は1.47人であった。

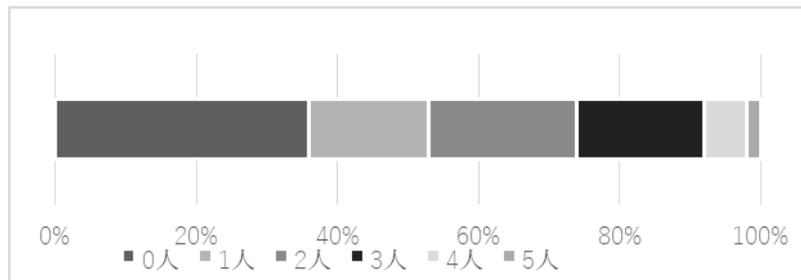


図2 累計交際人数

4.2 東北大生の恋愛対象の好み

1) 恋愛対象の特徴

一番回答が多かったのが“どちらかといえば活発である(34.3%)”と表現される特徴で、2~4番目が“どちらかといえば大人しい(22.2%)”、“どちらともいえない(21.3%)”、“活発である(19.4%)”と差がない結果となったが、最も支持が少なかった“大人しい”については1.9%であった。

2) 恋愛対象の好ましい年齢

ほぼ同率で選択する割合が最も高かったのは、“同年(38.2%)”と“こだわりはない(39.1%)”でした。少し離れて“年上(19.1%)”、さらに差がついて“年下(3.6%)”となった。

3) 東北大生と付き合いたいかどうか

票数が多かったのは“こだわりのない(64.2%)”、ついで“はい(26.6%)”、そして同票が“いいえ(4.6%)”と“誰かと付き合いたいとは思わない(4.6%)”であった。

ここから分かる好みとされる人物の特徴は、活発とされ、年齢には特にこだわりのないが、選ぶなら同い年、東北大生かどうかはあまり関係ない、といったものになると考えられる。

4.3 回答者の性格と交際歴

内的要因を問う 14 項目のうち、「自分の発言が意図しない形で他者に解釈される」と「約束を守らないことがある」の 2 項目については当てはまらない方が望ましい性質、その他 12 項目については当てはまる方が望ましい性質と考えられる。以下の分析の際は後者の 12 項目について尺度を反転させて行った（詳しい項目は表 1～3 参照）。

反転尺度を含む 14 項目の累計スコアの平均が、恋人の有無によって差があるのか welch の t 検定を行ったところ、恋人のいる人は 47.0、恋人のいない人は 44.4 という結果が 10%水準で有意であった。

また、各性質と累計交際期間や累計交際人数との相関を調べると特に「好意を持った相手には積極的に関わろうとする」という問いへの回答が、交際期間に対しては 0.38、交際人数に対しては 0.43 と強い相関があった。

4.4 内的要因と恋愛経験

内的要因の分類ごとに因子分析を行い、因子得点を調べた結果以下の表のようになった。

表 1 対人コミュニケーション能力についての因子分析

	因子負荷量	共通性
初対面の人と臆せず会話できる r	0.77	0.59
ノリが良いほうだ r	0.76	0.57
自分の発言が意図しない形で他者に解釈される	-0.36	0.13
好意を持った相手には積極的に関わろうとする r	0.47	0.22
困っている人がいたら放っておけない r	0.32	0.10
因子寄与	1.62	

表 2 社会的魅力についての因子分析

	因子負荷量	共通性
約束を守らないことがある	-0.17	0.03
自分の非を認めることができる r	0.99	0.97
経済的に余裕があると思う r	0.07	0.01

一度決めたことは最後までやり遂げる r	0.14	0.02
現状について、常に新しい視点や改善点を考えるようにしている r	0.17	0.03
因子寄与	1.06	

表3 自分磨きについての因子分析

	因子負荷量	共通性
自分に自信がある r	0.35	0.12
容姿について他人から褒められることがある r	0.69	0.47
自分の身だしなみやファッションに気を遣っている r	0.62	0.38
自身の成長のために、現在目標を持って取り組んでいることがある r	0.32	0.11
因子寄与	1.08	

※表1、表2、表3において質問項目の文末の r は反転尺度を用いたことを示す。

表2の社会的魅力では、「自分の非を認めることができる」という項目の反転尺度が非常に大きな因子負荷量となった。これは回答者の80.0%がこの問いについて「あてはまる」または「どちらかといえばあてはまる」に回答しており偏りが大きかったため分析に影響した可能性がある

求めた因子得点を用いて累計交際者数への効果について重回帰分析を行った。結果が以下の表4である。

表4 累計交際者数についての重回帰分析

	B	S. E.	β
切片	1.43**		0.14
対人コミュニケーション能力	0.50**		0.16
社会的魅力	-0.03		0.14
自分磨き	0.33*		0.18
調整済み R2 乗	0.11**		
N=90	**p<0.01 *p<0.1		

対人コミュニケーション能力と自分磨きについては、それぞれ1%水準、10%水準で有意に正の効果を確認された。

5. 考察と結論

仮説(1)に関しては、累計交際者数についての重回帰分析の結果より、仮説は支持されたといえる。仮説(2)は、対人コミュニケーションの質問が異性に限ったものではないため、仮説が支持されたとは言えないが、対人コミュニケーション能力が恋愛経験と相関があることは分かった。

リサーチクエスチョンである「なぜ東北大生間に恋愛経験の差が生じるのか」という問いに対

して、内的要因の効果を確認することができた。質問が自己評価に関わるものであるため、自己評価の高さによって恋愛経験に差が生じるといえる。

今後の課題として、回答者の人間関係環境も含めて自己評価と恋愛経験を分析するなど、様々な要因を考える必要があるだろう。

【参考文献】

相羽美幸. 2008. 「恋愛における問題状況での特定の異性に対する好ましさの評価」『日本心理学会大会発表論文集』72: 120.

堀毛一成. 1994. 「恋愛関係の発展・崩壊と社会スキル」『実験心理学研究』34 (2): 116-128.

北原香織里・松島公望・高木秀明, 2008. 「恋愛関係が大学生のアイデンティティ発達に及ぼす影響」『横浜国立大学教育人間科学紀要 1 教育科学』10: 91-114.

高坂康雅. 2011. 「大学生及びその恋人のアイデンティティと“恋愛関係の影響”との関連」『青年心理学研究』23 (2): 147-158.

大学生の外国語学習行動

岩淵一馬・大倉瑠那・下窪拓也

1. 研究関心

国際化が進み、グローバルな場面で活躍できる人材の需要が急激に高まる中、我が国の大学では産官のバックアップを受けながらグローバル人材の育成に取り組んできた（経済産業省 2010; 小林 2018）。これまで、グローバル人材の育成手段としては、留学の奨励が注目を集めている。しかし、国内にいながら多様な文化に接触する外国語学習も、国際化が進展する社会で活躍する人材の育成に貢献するものである。大学生の外国語学習向上に対して有効な手立てを明らかにすることは、グローバル人材の養成を目指す政策施行の一助となるだろう。そこで本研究では、日本人大学生の外国語学習態度を規定する要因を検討し議論していく。

2. 先行研究と仮説

大学生の外国語学習行動に影響を与えうる要因として、留学及び異文化接触経験が考えられる。小林千穂（2017）は、留学が大学生の英語学習モチベーションに与える影響に関する分析を行い、その結果留学は期間に関わらず、学習者の外国語学習モチベーションに対して肯定的な影響をもたらすという結果が示された。

しかしこの研究では、日本人大学生の外国語学習意欲の規定要因について言及しているが、あくまで外国語学習に対する意欲を回答者に尋ねているにすぎず、実際の外国語学習につながっているかについては明らかにしていない。そこで本研究では、留学経験が外国語学習行動に肯定的な影響を与えるという小林千穂の研究結果に則り、以下の仮説を立てて検証を行う。

仮説 1: 留学経験が外国語学習態度を促進させる

また、逆の因果関係として、留学を経験したために語学学習に積極的になるのではなく、留学に行きたいがため外国語学習を積極的に行っているとも考えられる。そこで本研究では、上記の仮説に加えて、以下の仮説も検証していく。

仮説 2: 留学に行きたいという希望が外国語学習態度を促進する

留学経験及び希望と外国語学習態度の関係性には、以下の要因が関連することが考えられる。まず、日本人大学生の短期留学志向の形成要因について分析した研究（小林 2018）では、就職活動への不安感が留学志向を減退させることを報告している。一方で、就職活動に不安を抱く人は、自らの労働市場価値を高めるために外国語学習に積極的になることも考えられる。実際に大橋・高嶋（2018）は、仕事での外国語の使用を目的として、大学での外国語の講義を履修している生徒が存在していることを報告している。二つ目に、社会的階層の影響が関与することが考えられる。小林元気(2018)は、社会的階層の高い家庭出身の大学生ほど留学を志向するようになると報告している。また、社会的階層の高い家庭で育つ学生は、文化的資本が蓄積され、この文化的資本は学習達成において肯定的な影響を与える（片岡 2001）。つまり、社会的階層の高い人ほど、外国語学習にも積極的であることが予想される。最後に、外国の文化や人に接触する機会が多い人ほど、外国学習に積極的になり、また、留学志向も強くなることが考えられる。以上の要因も考慮したうえで、本研究では外国語学習態度と留学経験、および留学志向の関連性を検証する。

3. 方法

3.1 分析対象

「東北大生の生活と意識に関する調査」における有効回答者 112 名のうち、問 3「あなたは留学生ですか」において「2 いいえ」と回答した日本人大学生 99 名を分析の対象とした。本研究では以下の変数を分析に用いる。

3.2 使用変数

<独立変数>

- ・留学経験及び予定の有無

問 10「大学入学以降、(期間に関らず) 留学をしたことがありますか？」

問 11「大学在学中に留学する予定はありますか？」

上記のいずれかの質問に対して、一つでも「はい」と答えた場合を、留学経験（予定）ダミーとする。

- ・留学希望

問 14.1「留学をしてみたいと思いますか？」という質問に対する、1（そう思わない）から 5（そう思う）の中から選ばれた回答を扱う。値が大きいほど留学希望が強いことを示す。

- ・外国人友人の有無

問 6「外国人の友人はいますか？」という質問に対して、「はい」と答えた場合を外国人友人

ありダミーとして扱う。

- ・渡航経験有無（大学入学以前）

問7「大学入学以前の海外への渡航経験（旅行、留学、居住を含む）についてお聞きします。」と述べた後、(a)「英語圏への渡航経験はありますか？」と(b)「英語圏以外の国への渡航経験はありますか？」のいずれかの質問に対して、「はい」と答えた場合を、渡航経験ありダミーとする。

- ・将来仕事での外国語使用の希望

問8「将来仕事で英語を使いたいと思いますか？」及び問9「将来仕事で現在履修している言語（英語以外）を使いたいと思いますか？」という質問のいずれかに対して「はい」と答えた場合を、仕事で使いたいダミーとして扱う。

- ・階層帰属意識

問13「日本社会を、1を一番上、5を一番下としたとして、1～5の5段階層に分けたとき、自分はどの階層に属すると思いますか？」という質問に対する回答を、階層帰属意識として扱う。値が大きいほど高い階層へ帰属する意識を持つことを意味する。

<従属変数>

- ・外国語学習態度

問4「大学の講義以外で外国語を勉強していますか？あるいはこれまでしていましたか？」と問5「必要単位以上に外国語の講義を履修していますか？あるいはしていましたか？」のいずれかの問に対して、「はい」と回答した場合を、外国語学習ありと見なして分析を行う。

上記の質問に加えて、回答者の基本属性として、年齢と性別（女性ダミー）を分析に用いる。

3.3 分析方法

はじめに主要な変数の記述統計を確認し、次に外国語学習行動と関連があると予想される変数との2変数間の関連を確認する。そして最後に、説明変数間の影響を統制して検証するため、二項ロジスティック回帰分析を行う。

4. 結果

4.1 記述統計

1) 各変数の値

まず、講義以外での外国語学習及び必須単位以上の外国語授業の履修に関する質問で「はい」と答えた大学生が、どのような外国語を学習しているのかまとめたものが図1である（なお、複数の言語を回答している回答者もいたため、言語ごとの学習者数の合計は後の表1で示されている外国語学習者数よりも多くなっている）。この図が示すように、最も多く学習されている言語が英語とイタリア語、そして次に多いのがラテン語となっている。

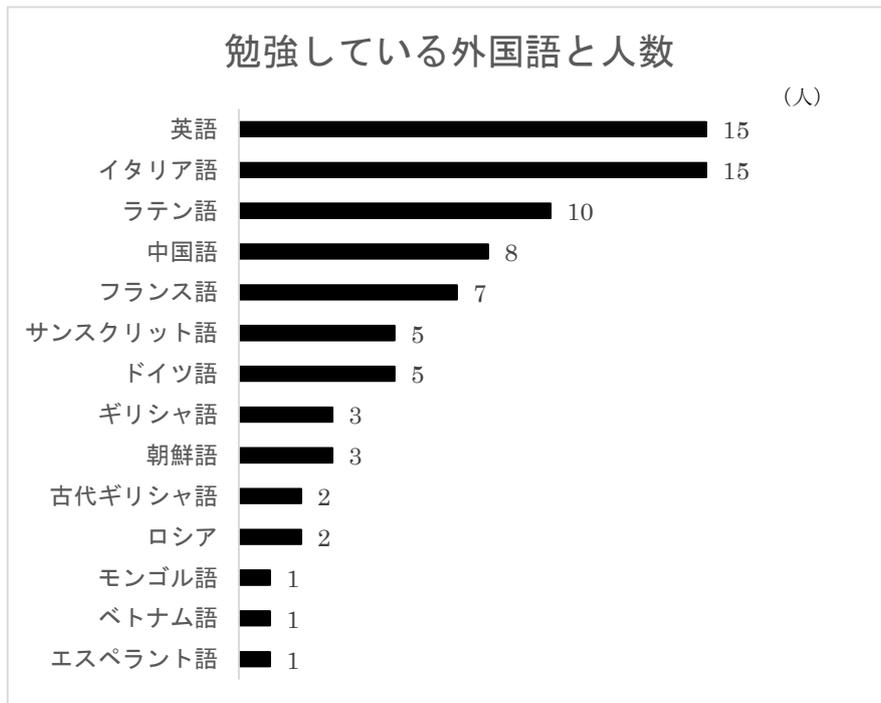


図 1 学習言語と学習者数

表 1 外国語学習態度、渡航経験、留学経験及び、留学希望の記述統計

度数 (%)	あり	なし		平均	標準偏差
外国語学習	52(53.5)	47(46.5)	留学希望	3.32	1.5
渡航経験	47(51.6)	44(48.4)			
留学経験または予定	25(27.5)	66(72.5)			

表 1 は、外国語学習態度、過去の渡航経験、留学経験あるいは予定に対する回答の度数 (%)、留学希望に対する回答の平均と標準偏差を表している。半分以上の回答者が、外国語学習に積極的に取り組んでいる、あるいは取り組んだ経験があることが分かる。また、若干ではあるが、渡航経験者の数が非経験者を上回っている。留学経験については、回答者のおよそ 7 割が、経験したことがない、あるいは今後する予定もないという結果になった。留学希望の平均値が、3.32 を示していることから、全体の傾向として、どちらかと言えば留学の希望が強いことが分かる。

2) 留学希望と外国語学習

留学に行ってみたいと思う人ほど外国語学習に積極的になると予想し、「留学をしてみたいと思いますか」という質問に対する回答 (5 件法) によって、外国語学習態度を比較した。その結果、図 2 が示すように留学をしてみたいと思う人ほど、外国語学習に積極的であることが分かった。またこの差は、平均値の差の検定の結果 1%水準で統計的に有意であることが確認された ($t(97)=2.66$, $p<.01$)。

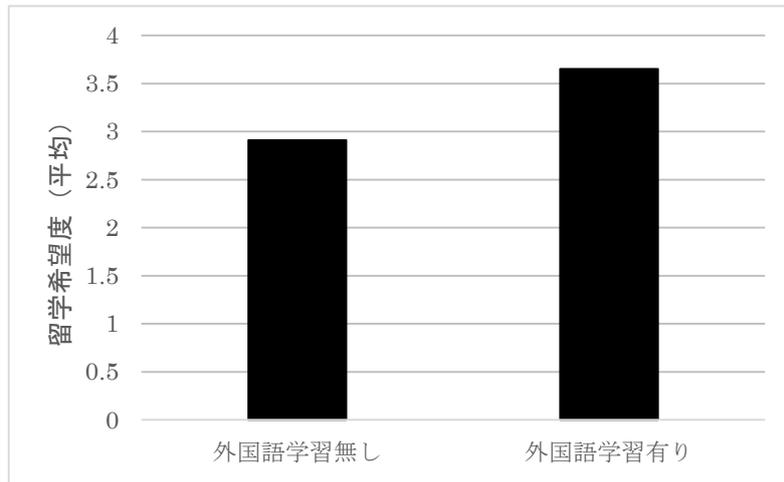


図2 留学希望度と外国語学習態度

3) 留学経験（あるいは予定）と外国語学習との関連

大学在学中に留学に行ったことがある人、あるいはこれから行くことが決まっている人は、外国語の学習に積極的であることが予想されるため、その関連を見た結果が図3である。図3では、一見、留学経験がある人またはこれから行くことが決まっている人の方が、外国語学習に積極的になりやすいように見えるが、 χ^2 検定の結果、留学経験（予定）と外国語学習態度との間に、統計的に有意な関連性は確認されなかった ($\chi^2(1)=1.75, p=1.75$)。

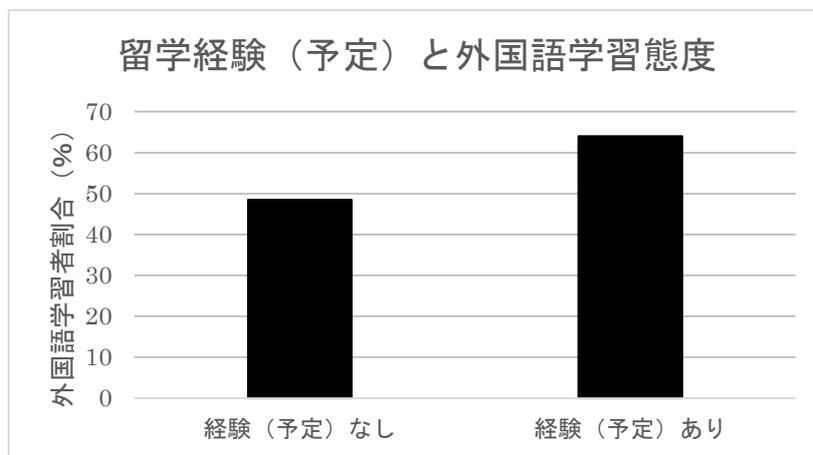


図3 留学経験（予定）と外国語学習態度

4) 海外渡航経験と外国語学習態度の関連

過去に海外へ行ったことがある人のほうが、外国の文化に触れ興味を抱くため、外国語学習に積極的になると考えられる。そこで、大学入学以前の海外渡航経験の有無と、外国語学習との関連を確認した（海外渡航経験有り 53 人、渡航経験無し 44 人）。その結果、図4に示すように、過去に渡航経験がある人は外国語学習に積極的な傾向にあることが分かった。また、 χ^2 検定の結果、過去の渡航経験と外国語学習態度の間の関連性が、5%水準で統計的に有意であることが認められた ($\chi^2(1)=4.79, p < 0.05$)。

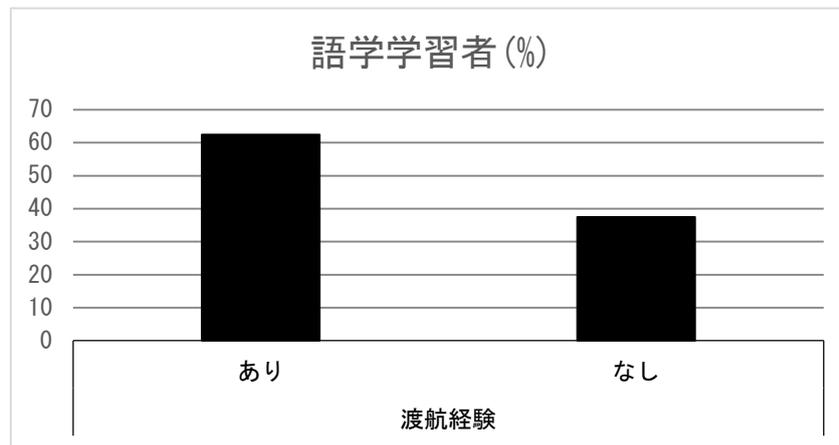


図4 渡航経験と外国語学習態度

4.2 多変量解析

各変数が外国語学習態度に与える影響を検証するため、二項ロジスティック回帰分析を用いて分析を行った。表2に結果が表示されている。Model 1では、回答者の基本情報となる年齢、性別のみの分析を行った。Model 2では、全ての変数を分析に投入した結果を示している。Model 2の結果からわかるように、過去の渡航経験ダミーが正に5%水準で有意に、そして、階層帰属意識が正に10%の有意傾向を示している。つまり、過去に海外に行ったことのある人や、社会階層が高い人ほど、外国語学習に積極的になることを示している。しかしながら、留学経験（あるいは予定）及び留学への希望のどちらも有意性を示さなかった。渡航経験ダミーと社会階層を除いて分析を行ってみたが、これらも係数が有意性を示すことはなかった。

しかしながら、図1の外国語学習者が学習している言語の中には、ラテン語や古代ギリシャ語など、実生活の会話等の場面においては実用的でないと考えられる言語もいくつか見られる。また、東北大学文学部には、そういった特殊な言語の習得が奨励される研究室もいくつか存在する。そのため、このような実社会において非実用的と考えられる言語を学習している回答者を外国語学習者として分析に加えることは、本研究の目的である、留学志向性と外国語学習経験との関連性にバイアスを与えることになるだろう。そこで、実用的な外国語を学習している大学生のみを外国語学習者と定義しなおして、再度、分析を行った。外国語に積極的に取り組んでいる人は24人、そうではない人は67人となった。Model 3と4が示すのが、その分析結果である。Model 4が示すように、女性は男性よりも学習する傾向が弱く、また、過去の渡航経験及び留学経験あるいは確定した留学予定を持っている人は、外国語学習に積極的であることが明らかとなった。留学への希望は有意な効果を示しておらず。留学経験を除いた分析でも同様に有意な値を示さなかった。また、留学への志向性を分析に組み込んでいないModel 3でも、階層帰属意識が有意な効果を示さないことから、実用的な言語の学習態度に対して本人の社会階層が関連を持たないことが明らかとなった。

表 2 二項ロジスティック回帰分析

	Model 1		Model 2		Model 3		Model 4	
	係数	SE	係数	SE	係数	SE	係数	SE
切片	-5.844	4.321	-8.795	5.463	-12.231	7.607	-1.156	0.248
年齢	0.303	0.216	0.254	0.25	0.466	0.359	0.8	0.424
性別（女性）	-0.210	0.446	-0.468	0.561	-1.305	0.602	-2.59 **	0.01
外国人友人あり			0.148	0.581	0.792	0.704	1.511	0.131
渡航経験あり			1.08 *	0.539	0.962	0.605	1.927 †	0.054
仕事で使いたい			0.466	0.629	1.261 †	0.675	1.055	0.292
階層帰属意識			0.685 †	0.388	0.109	0.422	-0.092	0.926
留学経験（予定）あり			0.63	0.763			2.031	0.042
留学希望			0.261	0.211			-0.222	0.824
N	99		99		91		91	
AIC	133.3		110.7		85.5		84.4	

*p < .05, † p < .10
SE: 標準誤差

5. 考察

以上の結果から、本研究の仮説は部分的に支持される結果となった。留学経験がある人あるいは今後行くことが決定している人は、実用的な外国語学習に対して積極的な姿勢を持つ。これは先行研究と一貫する知見であり、従来の研究で対象としていた意欲ではなく、実際の行動に関しても同様の結論が得られた点が有意義である。また、従来の研究では、留学をしたことによって、外国語学習意欲が高まったのか、留学をする前から、学習意欲が高いのかが明確にされていなかった。しかし本研究では、留学をしたいという希望と外国語学習態度が有意な関連性を示さなかったことから、希望ではなく実際に留学をすることによって、外国語学習態度が向上するという方向性が考えられるだろう。そして本研究では、女性が男性に比べて外国語学習に対して積極的であるという、先行研究(小林, 2018)の結果とは異なる結果が得られたが、東北大学文学部独自の性質あるいは、本分析に使用したサンプル内の性別の偏り（男性 32 人に対し女性は 63 人であった）が関与していると考えられるため、一般化可能な知見であるとは言えないだろう。

次に、大学入学以前の渡航経験がある人及び階層帰属意識が高い人ほど外国語学習を積極的に行なっていることがわかった。このような結果が得られた理由として、社会階層が高い家庭で育った人は文化的資本を多く蓄積し、異なる文化や言語への学習に積極的になると考えられる。次に、海外渡航の経験が、同様に、外国語という異なる文化への興味関心を刺激し、外国語学習に対する意識が他の学生よりも高くなる事が考えられる。

上記以外にも、サンプルサイズの少なさが推定に影響を及ぼしているだろう。従って、今後さらにサンプルを増やしたうえで、上記の点にも考慮したさらなる調査を行うことで違う結果が得られる可能性は十分にある。

6. 結論

本研究は、グローバル化が進展化する社会において求められる資質である外国語能力に対する学習態度の規定要因を探るため、東北大学文学部を対象に行った調査データの分析を行った。その結果、大学入学以降の留学経験の有無や予定は、実用的な外国語学習行動に対してのみ、有意な効果を持つという結果が得られた。しかし、留学への希望は有意な効果を示さなかったことから、留学に行きたいために語学学習に積極的になるのではなく、留学を経験した或いはすること

が決まったために、語学学習に積極的になるというメカニズムを示唆することになった。

非実用的な外国語も含めた外国語学習に対しては、階層帰属意識が高い人ほど、そして大学入学以前に海外の渡航経験がある人が、外国語学習を積極的に行なっていることがわかった。このような結果が得られた理由として、家庭環境に応じて獲得される文化的資本の差や、海外の渡航経験によって異文化に対する興味関心が向上したことが考えられる。ここで特に重要となるのが、外国語学習態度が、留学志向や外国語への憧れといった個人の意思ではなく、育った家庭環境や過去の経験に強く影響されることである。グローバル人材の必要性の増加に合わせて、政府は大学の国際化に関する予算を増幅している（小林 2017）。しかし、大学生の外国語学習態度を向上させるという点においては、大学入学以前の段階からの介入が必要となる。

本研究は、留学経験が語学学習行動にまで影響を及ぼしている点、大学生の大学以前の経験や家庭環境が学習態度に重要な影響を与えている点を示したことが有意義であると考えられる。しかしながら、上述したサンプルサイズや使用変数に関しては課題が存在するため、これらの課題を克服することで、外国語学習行動を規定する要因についてさらなる解明に繋がるだろう。

【参考文献】

- 片岡栄美. 2001. 「教育達成過程における家族の教育戦略: 文化資本効果と学校外教育投資効果のジェンダー差を中心に」『教育学研究』68(3):259-273.
- 経済産業省. 2011. 「産学人材パートナーシップグローバル人材委員会報告書」, 経済産業省ホームページ(2019年7月24日取得
https://www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/san_gaku_ps/global_jinzai.htm).
- 小林千穂. 2017. 「短期留学の外国語学習モチベーションへの効果」『天理大学学報』68(2):1-19
- 小林元気. 2018. 「日本人大学生の短期留学志向の形成要因」『留学生教育』23:33-41.
- 大橋洸太郎・高嶋幸太. 2018. 「学生が望む大学におけるよい第二外国語教育」『教育心理学研究』66(1): 95-106.

東北大生における『変わっている』意識と、自己肯定感やコミュニケーションとの関連

栗原淳・大友明啓・中明和聖

1. 研究関心とリサーチクエスション

私たちは、「変わった人だね」「ヘンな人だね」といった言葉を普段何気なく用いている。ここでいう「変わった人」というのは様々な意味で世間での通例から逸脱している特徴を有する人であり、マイノリティであることが前提である。また私たちはそうしたマイノリティは対人関係や社会生活で「生きづらさ」を感じているというイメージを持っている。

しかし実際にどれくらいの人が「変わっている」と自分を認識し他者から認識されているのか定かではないし、それがどの程度人間関係構築の障壁になっているか明確ではない。

そこで私たちはまず自校の学生（文学部生）の中で、「変わっている」と自分を認識している人

ほどのくらいいるのかを調査することにした。次にリサーチクエスチョンとして「自分が『変わっている』と認識している人のその認識に対する自己肯定感ほどの程度か」という問いを立て、コミュニケーションに関連した調査をすることに決めた。

この調査の意義は、自己の特性や対人関係に悩む人が、周囲の人間の傾向を知ることによって、より安心して、気持ちよく学生生活を送れるようになることである。

2. 先行研究

我々の班のリサーチクエスチョンは「自分が『変わっている』と認識している人のその認識に対する自己肯定感ほどの程度か」というものであった。

まず先行研究として、「変人キャラとして学校内でふるまっている生徒は、そのキャラの受容度が他キャラの受容度と比べ最も高い」ことを示す論文(千島・村上, 2014)から、我々は、「『変わっている』人のその認識に対する自己肯定感は、そうでない人の自己肯定感よりも高い」という仮説を立てた。

次いで我々はもう一つ仮説を立てた。それは「『変わっている』人の感じる、それに起因した人間関係におけるストレスは、そうでない人の感じるストレスよりも大きい」というものである。

「変わっている」ことへの自己肯定感が高くても、そのことにより個性が突出し、他者とのかわりのなかではストレスを感じる機会が多いのではないかと考えたためである。

また「変わっている」度合いを複合的に測定するために他者からの評価を質問に盛り込むほか、「変わっている」ということが日々のコミュニケーションにどのように影響するかも尋ねた。

速報版で検討した通り、自分を変わっていると評価していることは、それに対する自己肯定感に直接影響を与えているとは言えない、という結果が得られた。(「変わっている」と自己評価した人ほどその評価を受容し、「ふつうだ」と自己評価した人ほどその評価を受容しないという結果は得られなかった。)これは仮説に反する結果である。

3. 変数

問32では、自分が「変わっている」かどうかと、普段のコミュニケーションの円滑さについて質問した。問32(1)では自分が「変わっている」と認識しているかを1(思う)~5(思わない)の5件法で尋ねている。問32(2)では(1)で答えた自分の特性に対する評価を同じく5件法で尋ね、問32(3)では「変わっている」と言われた経験を1(ある)、2(ない)の二択から答えてもらった。問32(4)、(5)では(3)で1(ある)と答えた人のみを対象に、その周囲の評価を原因とする人間関係に関するストレス、同じく周囲の評価に関する満足度、をそれぞれ5件法で尋ねた。最後に(6)では全体に向けて、全般的な人間関係の円滑さについて同様に尋ねた。

5件法の質問文の作成にあたっては、キャラと友人関係満足度の関係を調査した論文(千島・村上, 2015)を参考にした。

使用した独立変数は4つである。

問32(1)で{1, 2}を選択した人を「1」、{3,4,5}を選択した人を「0」とした「自分を変わっていると思うかどうか」のダミー変数を作成した。1は自分を変人と考える人(「自己が認める変人」)、0はそうでない人(「非自己が認める変人」)である。これを自変ダミー変数と呼ぶ。

問32(3)で1(ある)を選択した人を「1」(「他者が認める変人」)、2(ない)を「0」とした「他者から変わっていると思われているかどうか」のダミー変数を作成した。これを他変ダミー

変数と呼ぶ。

さらに、自変ダミー変数と他変ダミー変数の値が一致している、すなわち自己認識と他者評価が一致している人（「自他共に認める変人」）を1、一致していない人（「自己は認めていないが他者が認める変人」）を0とするダミー変数をつくった。これを一致ダミー変数と呼ぶ。

最後に性別による影響を検討するため、問29の性別を問う質問をもとに男性ダミー変数をつくった。

4. 分析結果

4.1 度数分布と平均値の比較

まず問32(1)の結果としては、1~4のどれかの項目を選んだ人の合計は100人（90.1%）であり、文学部生では、何かしら「変わっている」点を自己に見出している人が大多数となった。（留学生を除くか検討した結果、分布に偏りがみられなかったためそのまま分析を進めた。）なお、各項目にどれだけの人が回答しているかという度数分布のグラフは以下ようになる。

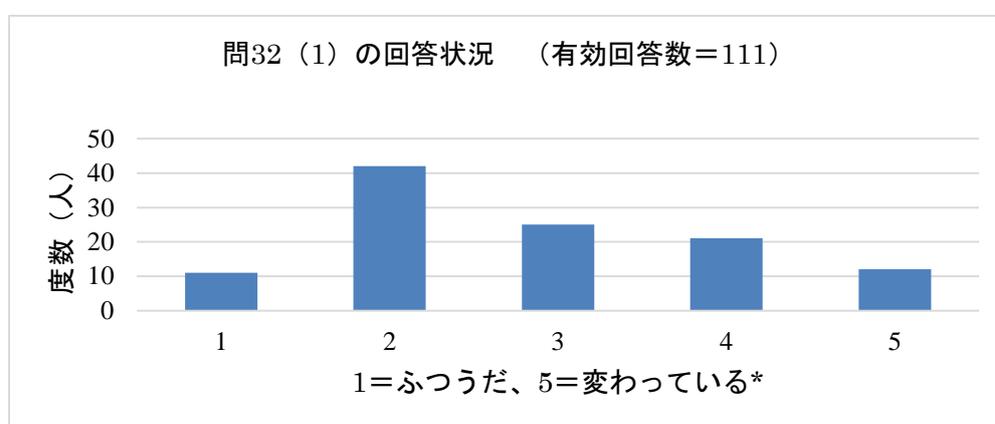


図1 自分をどの程度「変わっている」と思うか

(*質問紙とは項目の番号を逆転している。以下他の図表についても同様。)

また、さらに分析を進めるにあたって上記の自変ダミー変数を用いる。具体的には回答者を「変わっている」意識の相対的な強さの度合いで「自己が認める変人/非自己が認める変人」に分類する。(問32(1)で1,2の項目を選んだ人を、「変わっている」性質を比較的強くもつと自覚している人＝「自己が認める変人」＝1とする。)このとき、「自己が認める変人」(＝1)の度数は54(人)で、全体の48.6%を占める。

ここで、問32(2)自分の特性に対する評価の平均値をみる。「自己が認める変人」の平均値は2.63、「非自己が認める変人」の平均値は2.84であり、これらの平均値の差に有意な効果はなかった。したがって、「変わっている」という意識の強さに関わらず、極端にポジティブ、ネガティブな自己評価をする人は少ないという結果になった。

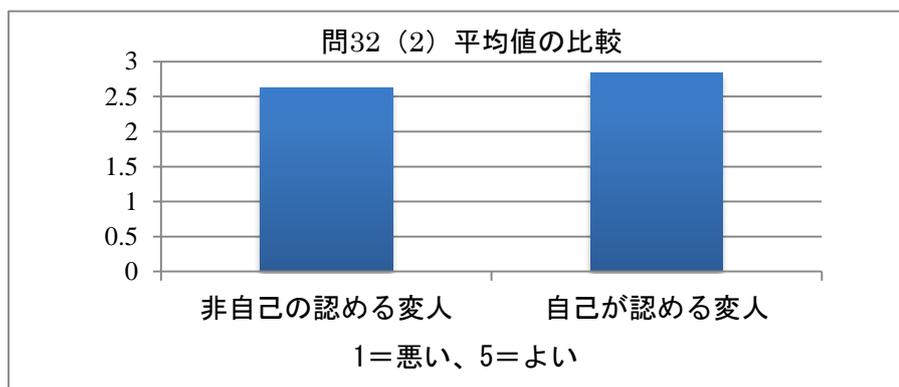


図2 「変わっている」度合いへの自己評価

次に他変ダミー変数を用いる。問 32(3) で 1 (ある) を回答した人を「他者が認める変人(66 人)」 (=1) とし、これに限り、問 32(4) 「他者による評価が原因で普段の人間関係にストレスを感じているか」、問 32(5) 「他者による評価に満足しているか」の質問に続く。

さらに問 32(4)(5)の分析にあたり、一致ダミー変数を用いる。「自他共に認める変人(40 人)」 (=1)、「自己は認めていないが他者が認める変人(26 人)」 (=0) を定義し回答を分類する。

結果は問 32(4)ストレスに対する前者の平均値は 3.49、後者の平均値は 3.92 で、問 32(5) 評価への満足度に対する前者の平均値は 2.46、後者の平均値は 2.73 だった。また両者の平均値の差に有意な差はなかった。したがって「変わっている」自己評価の強度に関わらず、他人からの評価が原因でストレスはさほど感じてはいないが、他人からの評価に特段満足しているわけでもない人が多数であるということがわかった。

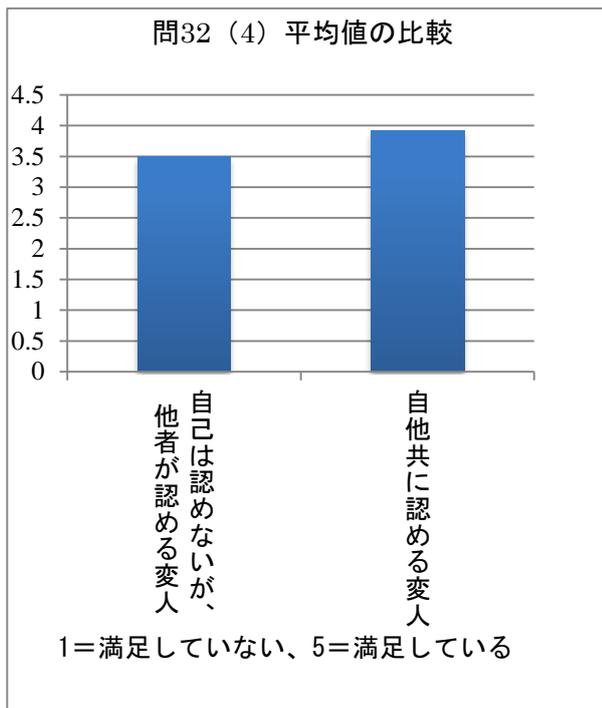


図4 他者による評価が原因で人間関係に感じるストレス

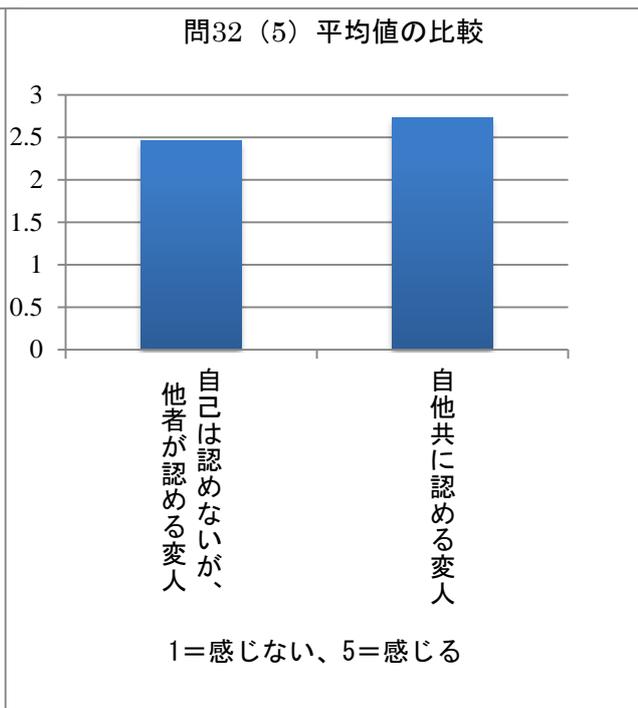


図5 他者による評価に満足しているか

4.2 各問に対する順序ロジスティック回帰分析

**表1.自分を「変わっている」と評価する程度の
順序ロジスティック回帰分析**

	B	S.E.
切片1	0.768	0.613
切片2	-0.632	0.597
切片3	-1.671**	0.612
切片4	-3.842***	0.686
人見知り	0.025	0.146
意思表示の齟齬	0.440**	0.146
自分に自信がある	0.047	0.132
英語圏への渡航経験	0.115	0.203
第3以上の外国語の履修	-0.175	0.200
G2	12.923	
NagelkerkeR2	0.116	

N=111 **p<0.01 ***p<0.001

**表2.問32(1)でした自己評価をどのように捉えているかの
順序ロジスティック回帰分析**

	B	S.E.
切片1	3.293***	0.860
切片2	0.514	0.546
切片3	-0.977.	0.552
切片4	-3.057***	0.630
自変ダミー	0.887	0.630
他変ダミー	0.083	0.502
自変ダミー×他変ダミー	-0.617	0.792
男性ダミー	0.156	0.387
意思表示の齟齬	0.138	0.158
G2	15.677	
NagelkerkeR2	0.144	

N=108 .p<0.1 ***p<0.001

表3.他者からの評価が原因で人間関係においてストレスを感じているかの順序ロジスティック回帰分析

	B	S.E.
切片1	-0.637	0.817
切片2	-1.993*	0.853
切片3	-3.005***	0.895
切片4	-4.612***	1.040
自変ダミー	0.669	0.493
男性ダミー	-0.334	0.514
意思表示の齟齬	0.346	0.231
G2	10.613	
NagelkerkeR2	0.161	

N=64 *p<0.05 ***p<0.001

表4.他者からの評価に満足しているかの順序ロジスティック回帰分析

	B	S.E.
切片1	1.306	0.919
切片2	-1.031	0.912
切片3	-2.89054**	0.998
自変ダミー	0.738	0.538
男性ダミー	0.585	0.570
意思表示の齟齬	-0.065	0.254
G2	5.256	
NagelkerkeR2	0.092	

N=60 **p<0.01

表5.日常生活において人間関係が円滑にすすんでいると思うかの順序ロジスティック回帰分析

	B	S.E.
切片1	3.044***	0.853
切片2	1.486.	0.791
切片3	0.442	0.783
切片4	-1.924*	0.803
自変ダミー	-0.370	0.629
他変ダミー	0.416	0.510
自変ダミー×他変ダミー	0.486	0.798
「変わっている」自己評価	0.351.	0.190
男性ダミー	-0.031	0.389
意思表示の齟齬	-0.493**	0.169
G2	22.037	
NagelkerkeR2	0.195	

N=108 .p<0.1 *p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

5. 考察

私たちはリサーチクエスションとして「自分が『変わっている』と認識している人のそれに対する自己肯定感ほどの程度か」というものをたてた。仮説は以下のとおりである。

・仮説1『「変わっている」人のその認識に対する自己肯定感は、そうでない人の自己肯定感よりも高い』

・仮説2『「変わっている」人の感じる、それに起因した人間関係におけるストレスは、そうでない人の感じるストレスよりも大きい』

これらの仮説を検証するため、t検定と順序ロジスティック回帰分析を用いて分析を行った。

まずt検定では仮説1・2ともに、仮説は支持されなかった。

つぎに仮説1について、まず変わっていると規定する変数を順序ロジスティック回帰分析で調べた。その結果、「意思表示に齟齬がある」が1%水準で有意であった。そしてこの「意思表示に齟齬がある」を含めた「変わっている」に関する変数を用いて仮説1, 2について順序ロジスティック回帰分析を行った。結果は、日常生活において人間関係が円滑に進んでいると思うかについて「変わっていることへの自己評価」が10%水準の正の効果、「意思表示に齟齬がある」が1%水準で負の効果を持った。したがって、仮説1, 2は支持されなかった。また自分を変わっていると認識している人・意思表示に齟齬があると感じない人は日常生活が円滑に進んでいると感じていることがいえる。

以上より、回答としては「自己をどの程度『変わっている』と認識している・されているか」ということと、(それに関する)自己肯定感の高低や感じているストレスの程度との間には関連がない」となった。また自分を変わっていると認識している人・意思表示に齟齬があると感じない人は日常生活が円滑に進んでいると感じていることがいえる。

意思表示に齟齬があると感じない人は日常生活が円滑に進んでいると感じていることは直観的

にも正しく、想定できる結果である。一方で、自分を変わっていると認識している・されているということは変わっているということに対する自己肯定感には影響していないということは想定から反する結果だった。変わっていると認識している・されている場合、自分でそう考えていたり、また言われたりすることがあるということで、変わっているという自己肯定感につながりやすいと思われるからだ。

さらに、このことから自己肯定感には自分が『変わっている』ということの影響は小さく、他の大きく影響する要因が存在する可能性がある。文学部生は（全般的な）人間関係や自己肯定感などを考える際にも、少なくとも自らが『変人』だということは重要視していない、といえるのではないか。

問 32(1)をみると、{1, 2} を選択している対象者の合計は半数以上 (56/111)、{1, 2, 3} を選択している対象者の合計はおおよそ7割 (81/111) である。これは自分を『変わっている』と感じている人は決してマイノリティではなく、むしろ多数派であるということを示している。そうした状況の中では自分が『変わっている』ということにポジティブにもネガティブにもならず、結果として関連性が出にくかったのではないかと考えられる。

課題としては10%水準と有意性がやや心もとないことや母集団における「変わっている人」の数の多さによる影響は否めず、信頼性を高めるためには複数回の調査が必要となるだろう。

【参考文献】

- 千島雄太, 村上達也. 2014. 「現代青年の友人関係における"キャラ"の受け止め方の発達：学校段階による比較(発達,ポスター発表 B)」(日本教育心理学会『第56回総会発表論文集 セッション ID: PB087』2014)
- 千島雄太, 村上達也. 2015. 「現代青年における“キャラ”を介した友人関係の実態と友人関係満足感の関連——“キャラ”に対する考え方を中心に」『青年心理学研究』26 (2): 129-146.

東北大学生の生活と意識に関する調査

お問い合わせ先：東北大学 文学部 行動科学研究室

調査実施責任者：文学部准教授 永吉 希久子

TEL: 022-795-6038

nagayoshi@m.tohoku.ac.jp

この調査は、東北大学の学生の皆様の現在の生活の様子や意識について、おうかがいするものです。東北大学文学部の2年生、3年生を対象とした授業を無作為に抽出し、選ばれた授業を受講していらっしゃる学生の皆様にご協力をお願いしております。この調査は、学生教育の一環として実施するものでもあります（授業科目：行動科学基礎実習）。できるだけ多くの方のご意見を反映した調査を目指しておりますので、ご協力賜りますようお願い申し上げます。

- この調査票に、**調査対象のご本人様**が、回答をご記入ください。調査の回答は、すべて集計して処理しますので、どなたの回答かわかるようなことは決してありません。また、調査の回答は、調査の目的以外には一切利用いたしませんので、安心してお答えください。
- 各質問の回答は、あなたのご意見に最も近いものを選び、あてはまる番号に○印をつけてください。あるいは、数字でご記入いただく質問もあります。複数の番号に○をつける問題については、質問の最後に指定しております。
- どうしても答えたくない質問には、無理に回答いただく必要はありません。空白のままにして次へお進み下さい。
- ご記入が終わりましたら、お手数ですがもう一度、回答もれや記入ミスなどがないかどうかお確かめください。
- 調査結果につきましては、8月中に速報版を、2020年3月に最終報告書を発行し、行動科学研究室のウェブサイト上で閲覧していただけるようになる予定です。

あなたのご自身のことについてうかがいます

問1. あなたの所属研究室を教えてください。

- | | | | |
|------------|------------|---------|----------|
| 1 現代日本学 | 2 日本思想史 | 3 日本語学 | 4 日本語教育学 |
| 5 日本文学 | 6 日本史 | 7 考古学 | 8 文化人類学 |
| 9 宗教学 | 10 インド学仏教史 | 11 中国文学 | 12 中国思想 |
| 13 東洋史 | 14 英文学 | 15 英語学 | 16 ドイツ文学 |
| 17 フランス文学 | 18 西洋史 | 19 哲学 | 20 倫理学 |
| 21 東洋日本美術史 | 22 美学西洋美術史 | 23 心理学 | 24 言語学 |
| 25 社会学 | 26 行動科学 | | |

問2. あなたは何年生ですか。

- | | | |
|--------|--------|--------|
| 1 学部1年 | 2 学部2年 | 3 学部3年 |
| 4 学部4年 | 5 院生 | 6 研究生 |
| 7 その他 | | |

問3. あなたは留学生ですか

1 はい

2 いいえ



4 ページ問 1 5 へ

問 4 へ

問4. 大学の講義以外で外国語を勉強していますか？あるいは、これまでしていましたか？

1 はい

2 いいえ



「はい」と答えた方へ、それは何語です(した)か？ _____

問5. 必要単位以上に外国語の講義を履修していますか？あるいは、していましたか？

1 はい

2 いいえ



「はい」と答えた方へ、それは何語です(した)か？ _____

問6. 外国人の友人はいますか？

1 はい

2 いいえ

問7. 大学入学**以前**の海外への渡航経験(旅行、留学、居住を含む)についてお聞きします。

(a) 英語圏への渡航経験はありますか？

1 はい

2 いいえ



「はい」と答えた方へ、それはどこの国でしたか？ _____

(b) 英語圏**以外**の国への渡航経験はありますか？

1 はい

2 いいえ



「はい」と答えた方へ、それはどこの国でしたか？ _____

(c) a または b で「はい」と答えた方にお聞きします。初めて海外に行く**以前**に、国内に外国人の友人はいましたか？

1 はい

2 いいえ

あなたの普段の学習活動についてうかがいます

問 15. あなたの普段の学習活動について自分の直感に最も合う選択肢を選んでください。迷った場合は自分の直感に一番近いと思われる選択肢を選んでください。

	そう思う		どちらとも いえない		そう思わない
1. レポートや課題はただこなしている。	1	2	3	4	5
2. レポートや課題は最小限の努力で取り組む。	1	2	3	4	5
3. 授業には意欲的に参加している。	1	2	3	4	5
4. 単位さえ取れば良いと考えて授業に参加している。	1	2	3	4	5
5. 授業を熱心に聞いている。	1	2	3	4	5
6. 自分は学習意欲が高い方だと思う。	1	2	3	4	5
7. 実際に自分は積極的に学習していると思う。	1	2	3	4	5
8. 勉強が好きである。	1	2	3	4	5
9. 自分は大学の勉強についていけていると思う。	1	2	3	4	5

問 16. 学部の中で自分の学力を位置づけるとすればどこに位置づけられるでしょうか。成績開示結果など、明確な指標が無い場合は直感で教えてください。

	上位		中位		下位
a) 入学時	1	2	3	4	5
b) 現在	1	2	3	4	5

問17. あなたの学問的な専門性について、自分の直感に最も合う選択肢を選んでください。
迷った場合は自分の直感に一番近いと思われる選択肢を選んでください。

	そう思う		どちらとも いえない		そう思わない
1.現在は1年生の時よりも自分の専門分野について勉強することが出来ていると思う。	1	2	3	4	5
2.専修の授業では他の授業よりも予習や復習、課題、テスト勉強に力を入れている。	1	2	3	4	5
3.授業外でも自分の専門分野を中心に専門書や新書を読むなどして勉強している。	1	2	3	4	5
4.授業外では自分の専門分野以外の学問を中心に勉強している。	1	2	3	4	5
5.授業外では専修の授業かは問わず、課題やテスト勉強でしか学習を行っていない。	1	2	3	4	5
6.大学では自分の専門分野を中心に勉強するべきであると思う。	1	2	3	4	5
7.大学では自分の専門を極めるよりもいろいろな分野の学問に触れるべきであると思う。	1	2	3	4	5

問 18. あなたの所属大学ないし所属研究室に対しての気持ちで直感に最も合う選択肢を選んでください。迷った場合は自分の直感に一番近いと思われる選択肢を選んでください。

	そう 思う		ど ち ら と も い え な い		そ う 思 わ な い
1. 学生が学習するための施設が整備されている。	1	2	3	4	5
2. 学習意欲を高めてくれる環境である。	1	2	3	4	5
3. 専修配属に際して自分の希望が十分反映された。	1	2	3	4	5
4. 現在所属する専修に対して満足している。	1	2	3	4	5
5. 教員は学生とのコミュニケーションを密にしている。	1	2	3	4	5
6. 授業や研究室での指導で教員から熱意を感じる。	1	2	3	4	5
7. 課外活動や授業内活動での人間関係に満足している。	1	2	3	4	5
8. 研究や学習面で大学生活に満足している。	1	2	3	4	5
9. 課外活動(サークルやアルバイト等)を含めた総合的な面で大学生活に満足している。	1	2	3	4	5

アルバイトについてうかがいます

【以下の質問の当てはまるものに 1つだけ **○**をつけてください。(問 2 3 のみ複数回答可)。】

問 19. 月の平均アルバイト収入額はいくらですか。

1. なし 2. 1 万円未満 3. 1 万円以上 3 万円未満 4. 3 万円以上 5 万円未満
5. 5 万円以上 7 万円未満 6. 7 万円以上 9 万円未満 7. 9 万円以上

問 20. 月の平均アルバイト時間は何時間ですか(月收入 5 万円、時給 850 円の場合、月 59 時間で
す)。

1. なし 2. 10 時間未満 3. 10 時間以上 30 時間未満 4. 30 時間以上 50 時間未満
5. 50 時間以上 70 時間未満 6. 70 時間以上 90 時間未満 7. 90 時間以上

問 21. 月の平均仕送り額はいくらですか。ただし家賃が含まれている場合は、差し引いて考えて下さ
い。

1. なし 2. 1 万円未満 3. 1 万円以上 3 万円未満 4. 3 万円以上 5 万円未満
5. 5 万円以上 7 万円未満 6. 7 万円以上 9 万円未満 7. 9 万円以上

(d) (c)で「2. いいえ」と回答した人のみにうかがいます。現在好意を抱いている人がいますか。

1. はい 2. いいえ

(e) より好ましいと思う恋愛対象の特徴はどれですか。

1. 活発である 2. どちらかといえば活発である 3. どちらともいえない
4. どちらかといえば大人しい 5. 大人しい

(f) 自分自身の特徴はどれですか。

1. 活発である 2. どちらかといえば活発である 3. どちらともいえない
4. どちらかといえば大人しい 5. 大人しい

(g) 好ましく思う恋愛対象の年齢はどれですか。

1. 年上 2. 同年 3. 年下 4. こだわりはない

(h) 東北大学の人と付き合いたいですか。

1. はい 2. いいえ 3. こだわりはない 4. 誰かと付き合いたいと思わない

再びあなたのご自身のことについてうかがいます

問28. あなたの年齢についてうかがいます。(数字を記入)

歳

--	--

問29. あなたは男性ですか、女性ですか。

- 1 男性 2 女性 3 その他 4 答えたくない

問30. あなたの身長についてうかがいます。あてはまるものに丸をつけてください。

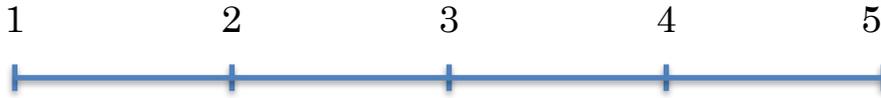
- | | |
|--------------|--------------|
| 1. ~145cm | 2. 146~150cm |
| 3. 151~155cm | 4. 156~160cm |
| 5. 161~165cm | 6. 166~170cm |
| 7. 171~175cm | 8. 176~180cm |
| 9. 181~185cm | 10. 186cm~ |

問3 1. 次に挙げることについて自分自身にどの程度当てはまりますか。あてはまる数字に丸をつけてください。

	あてはまる	どちらかといえばあてはまる	どちらともいえない	どちらかといえはまらない	あてはまらない
1.初対面の人と臆せず会話できる。	1	2	3	4	5
2.ノリが良いほうだ。	1	2	3	4	5
3.自分の発言が意図しない形で他者に解釈される。	1	2	3	4	5
4.約束を守らないことがある。	1	2	3	4	5
5.自分の非を認めることができる。	1	2	3	4	5
6.経済的に余裕があると思う。	1	2	3	4	5
7.一度決めたことは最後までやり遂げる。	1	2	3	4	5
8.現状について、常に新しい視点や改善点を考えるようにしている。	1	2	3	4	5
9.好意を持った相手には積極的に関わろうとする。	1	2	3	4	5
10.困っている人がいたら放っておけない。	1	2	3	4	5
11.自分に自信がある。	1	2	3	4	5
12.容姿について他人から褒められることがある。	1	2	3	4	5
13.自分の身だしなみやファッションに気を遣っている。	1	2	3	4	5
14.自身の成長のために、現在目標を持って取り組んでいることがある。	1	2	3	4	5

問3 2. 以下の6つの質問について、あなたの当てはまる箇所(1~5)に○をつけてください。

(1)あなたは自分のことを「変わっている」と思いますか。



1 2 3 4 5
思う (変わっている)

思わない (ふつうだ)

(2) (1)で答えた自分自身の特性について、あなたはどう思いますか。



1 2 3 4 5
よい

悪い

(3) 大学に入学してから、あなたは周りから「変わっている」と言われたことがありますか。

1. ある 2. ない
↓ ↓
(4) へ (6) へ

(4) (3)で1(ある)と答えた方にお聞きします。 その周囲からの評価が原因で、人間関係やコミュニケーションにストレスを感じますか。



1 2 3 4 5
感じる

感じない

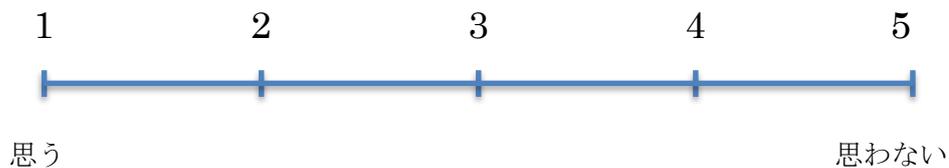
(5) (3)で1(ある)と答えた方にお聞きします。 その周囲からの評価に対して、あなたは満足していますか。



1 2 3 4 5
満足している

満足していない

(6) あなたは、日常生活において、自分の人間関係やコミュニケーションが円滑にすすんでいると思いますか。



問33. あなたは現在、どのように生活していますか。

1. 両親と一緒に生活している
2. 両親以外の家族（兄弟や親戚など）と一緒に生活している
3. 学校などの寮で生活している
4. アパート・マンションを借りて一人で生活している
5. その他（ ）

問34. あなたは普段何時間寝ていますか。

1. 5時間未満
2. 5～6時間
3. 6～7時間
4. 7～8時間
5. 8～9時間
6. 9時間以上

問35. あなたは中学生の頃、1週間に何日くらい朝食を食べていましたか。なお、飲み物、サプリメント(栄養補助食品)のみの場合は朝食に含めません。

1. ほとんど毎日食べる
2. だいたい毎日食べる（1週間に4、5日くらい）
3. ときどき食べる（1週間に2、3日くらい）
4. たいてい食べない

問36. あなたはいま、1週間に何日くらい朝食を食べていますか。

1. ほとんど毎日食べる → 問38へ
 2. だいたい毎日食べる（1週間に4、5日くらい）
 3. ときどき食べる（1週間に2、3日くらい）
 4. たいてい食べない
- 問37へ

問37. 問36で2～4を選んだ方にうかがいます。 食べない日があるのはなぜですか。以下の選択肢の中からあてはまるものをすべて選んでください。

- | | |
|-------------------|-------------------------|
| 1. 時間がないから | 2. 食欲がわからないから |
| 3. 朝食をとる習慣がないから | 4. 作るのが面倒だから |
| 5. 片付けが面倒だから | 6. 朝食を食べるのが面倒だから |
| 7. 朝食の時間がもったいないから | 8. 身支度などの準備で忙しいから |
| 9. 料理が準備されていないから | 10. 簡単に準備できるレシピがわからないから |
| 11. 太るから | 12. お金がないから |
| 13. 1日に2食で十分健康だから | 14. 朝は気分が悪い（食べられない）から |
| 15. その他（ | ） |

問38. 問36で1～3を選んだ方にうかがいます。 朝食には次のようなステップがあります。あなたは今、どのステップにあてはまりますか。

0. ステップ0 朝食欠食:

菓子パンや果物のみ, サプリメントのみ, まったく食べない

1. ステップ1 単品1品:

おにぎりのみ, トーストのみ, 牛乳のみ, ヨーグルトのみなど

2. ステップ2 単品2品以上の組み合わせ:

おにぎり+牛乳, パン+ヨーグルト+果物など

3. ステップ3 主食+主菜または副菜(料理2品):

ご飯+卵焼き(主食+主菜), ご飯+味噌汁(主食+副菜)

4. ステップ4 主食+主菜+副菜(料理3品以上)

ご飯+卵焼き+味噌汁(主食+主菜+副菜)

これで質問は終了です。長い間、数多くの質問にお答えいただき、誠にありがとうございました。たいへん恐縮ですが、はじめに戻って、記入漏れや書き間違いがないかどうか、ご確認をお願いいたします。

最後に、本調査に関してご意見・ご質問がありましたらご自由にお書き下さい。